

# 伊能忠敬研究

二〇一七年 第八十二号

史料と伊能図



史料と伊能図 「伊能忠敬研究」

二〇一七年 第八十二号

伊能忠敬研究会

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.82 2017

## 国立国会図書館蔵

## 伊能大図 七六号部分 柏崎・長岡

この地域の測量は第三次測量（青線）と、第四次測量（赤線）の二回である。

第三次測量は江戸から奥州街道を北進し、白河・会津若松・山形・秋田・青森を経て、日本海沿岸を南下、新潟を経て、図中の尼瀬（出雲崎）から柏崎に着いた。享和二年（一八〇二）十月一日のことであつた。その後、鉢崎・高田（上越市）経て海岸を離れ上田城下から中山道で高崎を経て十月二三日江戸に帰着した。

第四次測量は翌年の二月二五日江戸を出発し東海道を通り関ヶ原を経て敦賀に出た。日本海沿岸を北上し、富山を経て八月八日姫川近くの歌村に着いた。止宿に糸魚川の問屋弥右衛門が見舞いに来た。忠敬が海岸測量の手配を頼んだところ、姫川は急流で川幅は一〇〇間もあり船で渡れないので、上流の街道を渡つて下さいとのことであつた。

翌日、忠敬が川沿いに行つて見ると、大した急流でもなく測量隊を呼んで容易に渡ることができた。忠敬は弥右衛門らを呼びつけ「測量御用に差し障りがある」と咎めた。村役人らも不届きを詫び一件落着に思えたが、後に歴局から「急御用状」が届く事件になつたのである。これが所謂、糸魚川事件である。

八月一七日、図中の柏崎を経て尼瀬で風待ちして佐渡に渡る。手分けして佐渡の測量を終え、九月一七日、寺泊に戻った。信濃川に沿つて、地蔵堂を

経て九月二二日、図中の長岡城下（牧野備前守）に着いた。止宿（青柳屋利右衛門）、（町数一九町、家数千二百軒）。

三国峠を越え、高崎・熊谷を経て、十月七日江戸に戻った。（宮内 敏）

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



## 表紙解説

## 伊能忠敬測量経路（第3、4次の部分）

享和3、4年（柏崎・長岡）渡辺一郎・宮内敏

## グラビア

## ●伊能忠敬北海道上陸の地吉岡

銅像建立を目指して  
忠敬・林蔵の足跡を踏みしめて

中塚徹朗  
前田幸子  
伊能楯雄

## 研究と話題

## ●伊能忠敬 周辺の人⑦

堀田撰津守正敦

伊能楯雄  
中塚徹朗

## ●多度津藩勘定方日記より

監修 渡辺一郎・編著 井上辰男

伊能楯雄  
中塚徹朗

## ●幕府測量方関係記事を抜粋（一）

原文 柴田勲夫・渡辺一郎

## 資料

## ●伊能忠敬測量隊の足跡をたどる 連載第十七回

玉造功  
酒井道久

玉造功  
酒井道久

## ●伊能探訪－肥前・筑前の旅－

大沼晃・写真狼

大沼晃・写真狼

## ●伊能忠敬像制作記

戸村茂昭

戸村茂昭

## ●伊能、江戸の仮住い

柏木隆雄

柏木隆雄

## ●忠敬資料の絵図「金澤八景之図」を読み解く

鈴木由生子・戸村茂昭

鈴木由生子・戸村茂昭

## 忠敬談話室

戸村茂昭

戸村茂昭

## ●忠敬に着せたといわれるドテラ

芳明

芳明

## ニュース・会員便り・お知らせ

（北海道・千葉・神奈川・福岡・佐賀・熊本）

新入会員自己紹介&会員動向

紙上総会報告

## 目次

82号

伊能忠敬北海道上陸の地

福島町吉岡

# 伊能忠敬銅像

建立を目指して



福島町吉岡は  
伊能忠敬 北海道上陸の地である

寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日、  
伊能忠敬ら六名は江戸深川を出立、蝦夷地を目指した。

五月十日、津軽領三厩村（青森県）に着く、この地で風待ちする」と八日間。十九日、函館を目指して出帆したが着いた所は吉岡（現福島町）だった。

この日、風向き変わらず吉岡に泊る。

二十日も風向き変わらず陸地を歩いて函館を目指す。この日は福島に泊る。二一日、木古内を経て、二二日、当初の目的地函館に着いた。

福島町では伊能忠敬の蝦夷地測量が福島町吉岡から始まったという事実を後世に伝えるため「伊能忠敬北海道測量記念碑」を建設することになった。そのため「福島町伊能忠敬北海道測量記念碑建設基金」を創設。没後二百年となる平成三十年に記念碑を建設することを目指し、全国の賛同者から寄付金を募集している。

問合せ先

住所 〒049 1392

北海道松前郡福島町字福島820

○担当 福島町役場 総務課

○電話 0139-47-3001

○FAX 0139-47-4504

E-mail zmu@own.fukushima.hokkaido.jp



## 忠敬・林蔵の足跡踏みしめて

松前藩主らが歩いた旧街道を行く「第24回殿様街道探訪ウォーク」が去る5月3日開催された。テーマは「伊能忠敬と忠敬の弟子の間宮林蔵」 約100名が新緑の散策を楽しんだ。先頭は本会会員で福島町史研究会長の中塚徹朗氏。福島町長、本会員の齊藤サダ様も参加。



## 堀田摶津守正敦 前田幸子



○仙台での前半生  
※年齢は数え年

## ○林子平と伊達家、伊能家

堀田正敦と伊能忠敬の両方に関係する人物として林子平（一七二八—一七九三）がいる。

## はじめに

堀田摶津守正敦は伊能忠敬の測量事業を指揮監督した幕府の若年寄である。その名前は忠敬らへの任命書、測量旅行の命令書等の公文書の中に入られるが、忠敬の『江戸日記』や書簡類の中にもしばしば登場している。若年寄といえば幕府組織の中でも老中に次ぐ高官であるが、忠敬にとっては雲の上の人ではなかった。第三次測量の途次、忠敬は久保田（秋田）で残暑と雨に苦しみ、体調を崩してしまった。その夜、忠敬は正敦に拝謁する夢を見たという。忠敬の堀田侯に対する厚い信頼と敬意を表わす逸話ではないだろうか。幸いなことに、堀田侯は四十数年も若年寄として在任し、十七年間の測量事業の最初から最後まで一貫して統括指揮官として支援し、大事業を成就せしめた。その幕政における業績は偉大であり、履歴から現れる人物像は巨大かつ謙虚である。今回はたぐいまれな人格者であり、当時の幕政のレジェンドともいすべき存在であった堀田正敦について、伊能測量との関係を中心に考えてみたい。

## ○青年時代

正敦の仙台在住時代の逸話はほとんど伝わっていない。しかし正敦の歌集や文集などの著作、あるいは諸本にみえる人物評からは若年より文武の道に励んでいたことがうかがわれる。

正敦の学問の師は仙台藩の漢学者であつた田辺希文（一六九一—一七七三）と畠中荷澤（一七三四—一七九七）であったという。田辺希文は『伊達世臣家譜』の編纂に携わった歴史家・神道家であり、

大槻玄沢らと交友し、天明七年五十歳の時、仙台で僅か三十八部刊行した『海国兵談』が発禁処分となり江戸に護送されて入牢、蟄居処分となつた。正敦が若年寄に就任した翌年で仙台藩の後見をしていた時期である。

・・・・・

## 【写真】野帳と筆を持つ林子平の像

仙台市勾当台公園

【夢に堀田侯に謁す】（第三次測量）  
『測量日記』享和二年（一八〇二）七月  
「同」二十六日 朝大雨、五ツ半頃より北風になり晴。午前より午中晴、太陽を測る。夜小雨、予二十五日より病氣、此夜（二十六日）夢に堀田侯に謁す。」

【夢に堀田侯に謁す】（第三次測量）  
『測量日記』享和二年（一八〇二）七月  
「同」二十六日 朝大雨、五ツ半頃より北風になり晴。午前より午中晴、太陽を測る。夜小雨、予二十五日より病氣、此夜（二十六日）夢に堀田侯に謁す。」



後年「水月」と号し、松平定信らの文人サロンで活躍する素地はこの期間に培われたと考えられる。また正敦は馬術や武術、その他の諸芸にも秀でていたといい『よしの冊子』、鷹狩などでも優れた技量を示した（『続徳川実紀』）。

なお、只野真葛（仙台藩医・工藤平助女）の『むかしばなし』に正敦（二十三歳頃）が築地の工藤邸の普請開きにやって来たという記述がある。正敦が当時出府していたこと、工藤平助と交際があることがわかる。同じく仙台藩医だった桑原隆朝純とも早くから交際があったと思われるが、それを裏付ける資料がない。

#### ○別家当主・中村村由

正敦は二十一歳のとき中村姓を下賜されて別家を興し、中村村由を名乗った。その際に一万石を与えたようである。『よしの冊子』に「今は一万石もらつて樂ではあるが、なんとかして公方様の御人（臣下）としてお仕えしたいものだ。お仕えできれば旗本でもよい」と常々言っていたという逸話が載っている。「公方様の御人」になるのは外様大名の子息では難しかつたので、譜代大名か旗本家の婿養子になることを望んでいたと考えられる。そのためであろう、正敦にはすでに側室（妾）が一人と子供が三人いたが、正妻は迎えていなかった。

正敦の望みがかなつて養子先が決まつたのは三十二歳の時である。天明六年（一七八六）三月、堀田家の養子となるため仙台を離れて江戸へ出ることとなつた。「もう一度と故郷に帰ることはあるまい」と胸塞がる思いで旅立つたことが後年の『閑之末日記』に綴られている。

この養子縁組が成立した事情、持参金等の詳細は不明であるが、この縁組により以後の正敦の人生が飛躍的に展開することとなつた。

#### ○江戸での新人生

##### ○堀田家の婿養子

天明六年（一七八六）三月二十三日、江戸に到着した正敦は、三日後には早速堀田正富の養子となり、その娘との婚約も取り交わした。養子先の近江堅田藩堀田家は名門佐倉藩堀田家の分家にあたり、一万石の譜代大名で、しかも藩主は定府（江戸常住）の大名という、幕府の役職に就くにはうつてつけの家だった。養父となつた堀田正富（一七五〇—一七八七）は正敦とわずか五歳違いでまだ三十七歳だった。子が一人あり、正敦の正室となつた女子のほか梅之丞という男子がいたが、正敦を養子に迎え家督を譲つて隠居、五年後に四十二歳で病没した。

正敦は堀田家の養子となり婚約した後も、仙台から連れてきた妾や子供とともに仙台藩下屋敷で暮らしていた。翌年の天明七年五月、幕府から婚姻許可が出たらしく、麻布白金の堀田邸に移り、堀田家代々の通字「正」の字を承けて諱を正敦と改めた。六月に婚礼、七月に將軍家斎に初御目見、九月に家督相続、十二月には従五位下摂津守に叙任、という経過を経て、堅田藩主堀田摂津守正敦が誕生した。

念願の譜代大名となり、三十三歳でやつと有資格者になつたわけである。しかし正敦が幕府の役職を得て「公方様の御人」となるのは、さらに二年後、出府から数えて三年後のことである。

#### ○松平定信との出会い

正敦は出府後の三年間のどこかで松平定信と出会つたと考えられる。『よしの冊子』には正敦が「江戸へ出た当初は仙台弁で耳障りだつた」が、「その有能さで、人材発掘をしていた定信に見出された」という逸話が載つている。その時期は『宇下人言』（定信の回顧録）にみえる交友関係の記述から、定信の老中就任後の天明七年以降であろうと推定されている。どのような機縁で知り合つたかは定かではない。大名となつた正敦が、定信の文人サロンに参入したとも考えられる。定信は家格として大番頭どまりだつた堀田家の正敦を若年寄に抜擢し、正敦も定信の期待によく応えた。両者は晩年まで公私にわたる緊密かつ良好な関係を築いた。

#### ○幕政への登場

定信によって見出された正敦は、寛政元年（一七八九）四月、ついに念願を果たし、大番頭とし

堀田正敦肖像画

佐野市郷土博物館提供



て幕府の役職に就いた。その翌年（一七九〇）六月には若年寄に昇進、麻布白金の堅田藩邸から大手前の官邸に移った。以後、四十年間もここに住み続け、「大手侯」「大手様」と呼ばれたことは周知の通りである。

正敦の若年寄としての主たる職務は勝手掛すなわち財政担当であった。正敦は文教担当としての活躍が知られているが、実は長年にわたって幕府財政の立直しに奮闘していたのである。正敦は勝手掛としても有能だつたらしく、就任四か月後には勝手掛の統括に任せられている。

六年後の文化三年二月、勝手掛としての多年の精勤の労に対し三千石を加増された。その後も文政二年（一八一九）六十四歳で免じられるまで、二十九年間も勝手掛を勤めた。

#### ○寛政の改革

正敦が出府した天明六年（一七八六）は家治から家斎への将軍の代替わりの年であった。家治に重用された田沼意次が失脚し、翌年松平定信が老中首座となつて寛政の改革に着手、田沼の重商傾向をあらため、農村を重視する政策に転換した。天明大飢饉後、没落農民が都市に流入し、農村の疲弊と都市問題を引き起こしており、また幕府や諸藩の財政悪化を招いていたからである。定信は改革の断行を輔佐する若手の人材を発掘し、閣僚に抜擢した。老中首座は六十九歳の田沼から三十歳の定信に代わり、人事は一新された。

正敦と定信はともに飢饉で大打撃を受けた奥州の出身であり、問題意識を共有していた。正敦は定信の政策を迅速かつ着実に処理し、人格を備えた能吏として活躍した。その手腕は「利刃の毛を

吹くが如し」（切れ味の鋭い刀のようだ）と評された。

#### ○享保の遺制

いわゆる寛政の改革とは、天明七年七月、「享保の遺制」に則る旨を申し渡して始まつたものである。すなわち、將軍吉宗の治世である享保時代のやり方を模範とするというものであった。定信は吉宗の孫にあたり、祖父の事績を非常に尊敬していたからである。吉宗が果たせなかつた事業の実現をも目指したといわれる。

#### ○吉宗の改暦事業

將軍吉宗は自然科学を好み、江戸城吹上御苑の天文台で自ら天文観測を行い、観測機器の考案までした理系の人間であつた。

吉宗は天文暦学に熱心に取り組み、西洋暦学を取り入れた改暦を命じた。涉川春海が作った貞享暦がすでに合わなくなつてきていたからである。経余曲折を経て宝暦暦が出来たが、数年後に早くも日食の予報を外すなど欠陥が露呈し、この改暦は失敗に終わった。

#### ○吉宗の地図事業

將軍吉宗はまた地図の愛好者でもあった。吉宗は日光社参詣に際し、書物奉行が六国史類（古事記や日本書紀など）を持って供奉する慣例をやめて近辺の国絵図や城絵図を持参させ、近郊にでかける際にも必ず江戸地図を持参したという逸話が伝えられている。

また、在任中に国絵図を三四三回も閲覧して世間の噂にまでなつていたといわれる。

#### ○定信の文教政策

松平定信は「昌平坂学問所の設立」「寛政異学の禁」「學問吟味」「素読吟味」の実施等、その後の幕政の基本となるような重要な施策を短期間のうちに繰り出した。それらは定信の強力なリーダーシップの下で行われたものだが、正敦の卓越した行政能力があつてこそ実現したものともいえる。

吉宗が果たせなかつた改暦事業は寛政の改暦として実現し、また正確な日本地図は伊能忠敬の実測日本全図として実現した。以下、正敦が管轄した主要文教事業を年代順に挙げる。



紅葉山文庫の御国絵図箱  
国立公文書館蔵

## ◆『よしの冊子』の人物評◆

◇『よしの冊子』は老中松平定信が家臣に世間の中から若年寄就任前後の正敷に関する記述内容はあくまでも噂であり必ずしも史実とは限らないが、当時の世相をみるのに貴重な資料とされる。この中から若年寄就任前後の正敷に関する記事を紹介する。

(見出しは筆者による)

### ①公方様の御人

堀田摶津守殿は有能な人物だそうだ。(松平定信が人材発掘をしている)当節、見出されでしかるべき人物であるとのこと。仙台侯の八男で堀田家へ養子に来られた。江戸へ出た当初は仙台弁で耳障りだったそうだ。仙台でも摶津という名で、部屋住み時に「今は一万石もらつて樂ではあるが、なんとかして公方様の御人(臣下)としてお仕えしたいものだ。お仕えさえできれば旗本でもよい」と常々言つていたそうだ。その後江戸に出て袖ヶ崎の仙台藩下屋敷に住んだが、その屋敷に妾を二人置いていて、「いと」という女性には常之丞といふ名もあるそうだ。堀田家へは妾のことを隠して婿養子に来られたそうだ。その妾と常之丞は今も袖ヶ崎におられるとか。

### ②文武両道、多芸多才

摶津殿は文字も和歌も上手。源氏物語の講釈など諸侯方でされる由。同じ兄弟でも兄の土井山城殿は淫蕩で、そのせいか去年隠居されたそうだ。堀田摶津殿は馬術巧者で名人級の腕前。大名では堀田、旗本では近藤左京と言っている。堀田侯は武芸にも秀で、その他も多芸。御養父

である堀田正富のほうは、梅之丞とやら申された時分はひどく放蕩で、一度は座敷に押込になつた。今でも放蕩だという評判である。

### ③仙台藩の後見

堀田摶津守殿は元來慈悲深く才覚や知略も有るので仙台家中の人々が感服して、あの方が当主になつたらよかろうに、と言つてゐるそうだ。仙台侯(兄・伊達重村)は部屋に引きこもつて家老にもめつたにお会いにならないので家中がみんな困つたところ、摶津守殿は案内なしに居間へ入つて行つて話などされても仙台侯は小言を言わなかつたそうだ。近頃、松平定信公の仲介により摶津守殿が藩政に関わるようになつて改善された由。

そのご褒美という少し召しか、このたび摶津守殿が大御番頭に仰せ付けられた(④へ続く)

松平定信公が堀田若狭守(摶津守の誤り)を呼んで仙台の事をとくと言ひ含められたそうだ。仙台侯(伊達重村)を隠居させ、全体を改めるのがよいと仰つたという話だ。そもそも定信公の就任以前から、仙台家中は越中様(老中・牧野越中守)へお使い申し上げて御療治を願いたいと申していた由。重臣達百二十人ほどが願書を差出したという話もある。片倉小十郎(家老)など内々越中様へ御願い申し上げたという話もある。いずれにしても今の仙台侯がご家督では改まらない由。

### ④組風改善

摶津守殿が大御番頭に仰せ付けられたところ、大番組(警衛組織)は元來組の気風が甚だ悪いのだが、摶津守殿が世話を焼いて文武を奨励し、学問する人には講釈をしたり文章を書かせたりして

いるそうだ。配下は文句を言つてゐるが、總じて適切な評判をとつて、このたびまた(若年寄に)抜擢されたとのこと。今はまだ田舎者風のところがあるが、ゆくゆくは御勝手方にもなるだろうとの評判である。

### ⑤あれがならずに誰がなる

摶津守殿はとても人柄が良く、病身の養祖母へのお仕え方も非常に宜しいとのこと。養祖母の兄弟である松平玄蕃頭も感心して「当節、あれが若年寄にならないで誰がなるのだ」と申されたという話だ。

### ⑥湯茶の思いやり

御目見以下の人々があちこちに「対客登城前」(就職活動のため登城前の幕府重職の邸に御機嫌伺に参上する慣行)に出て、たばこは吸うが湯茶に渴んでいたところ、若年寄になられた堀田侯の所では大薬缶にいっぱい茶を入れて茶碗も十個ばかり出しておいたので大いに喜ばれたそうだ。薬缶が空になればお茶を入れ替えて出し、たばこ盆の火も入れ替えて細やかに気配りされているよし。今度青山(青山幸元 寛政三年九月辞職)の後任の若年寄が来たら堀田侯が師匠役だろうから、おそらくお茶のことも伝達されるだろうと喜んでいたそ

### ⑦朱子学の勉強会

堀田摶津守は服部善蔵(栗齋)を招いて『近思録』(朱子学の教本)の会を始められたそうだ。摶津守は漢文をかなり読めるとのこと。近頃は経学(儒学)の勉強をされているとのことである。

### ○天文学者調査 天明七年（一七八七）

正敦の就任以前のことであるが、学者等の調査が行われた。『続徳川実紀』天明七年（一七八七）七月の条に「此月文学并軍学、天文学より、凡て武芸の師たる者の姓名、流名、年齢、居所等委しく記し出すべしと触らる」とあり、天文学ほかの学問や武芸の師匠の所在調査が行われたことがみえる。前月に老中に就任したばかりの定信が、文武奨励政策の実施に先立つて全国的な調査をしたようである。大坂で天文暦学の私塾「先事館」を開いていた麻田剛立もこの調査でリストアップされたはずである。

○寛政改暦 寛政七年（一七九七）正敦43歳  
西洋天文学による改暦は吉宗以来の念願であったが、そもそも儒教思想では人民に正しい暦を授けるのが為政者としての任務とされたので、すでに合わなくなっていた貞享暦の改定は定信としても急務であったと考えられる。寛政七年四月、高橋至時が江戸に召出され、改暦事業が始まつた。定番同心だった高橋至時を旗本に抜擢し、町人出身の間重富を天文方に採用するなど、前代未聞の人事でも話題となつた。至時、間らの奮闘によつて新暦は寛政九年十月に完成し、正敦は十二月二十七日に改暦御用取扱の勞より褒賞を受けた。このあと正敦が私人所有の『ラランデ暦書』を高橋至時に貸し与え、のちに大金で買い取つて与え、至時が『ラランデ暦書管見』を著したことは周知の通りである。

○『寛政重修諸家譜』寛政十一年（一七九九）  
この事業は「諸大名以下、幕臣御目見以上」の

諸氏の系図・略歴を編纂するもので、寛政十一年に「堀田撰津守正敦の請ひ申すにより」すなわち本人の請願によつて正敦に系図の書継ぎが命ぜられた。同族の堀田豊前守正毅（近江宮川藩主）を副に、大目付一人、目付一人、奥右筆組頭一人、奥右筆六人の体制で正敦・正毅の邸にその局を設けた。

編纂作業に従事する者は、正敦の家臣らを含めて五十人ほどもいたといわれる。取調にあたり「不明の事があれば堀田撰津守正敦、堀田豊前守正毅から直に尋問があるし、所属がある者については所属長に問い合わせるので、その旨心しておくように」とのお触れが出た。のちに書継ぎを重修（校訂）に変更して、十四年後の文化九年（一八一二）十月に完成した。一五三〇巻。『寛政重修諸家譜』と命名された。序文は正敦が書き、編纂の意図を格調高い漢文で述べている。文化九年十一月二十三日、正敦は功勞により將軍の御前で佩刀を賜つた。『寛政重修諸家譜』は現代でも江戸時代を研究する者にとって必須の史料とされている。

○全国測量事業 寛政十二年（一八〇〇）46歳  
御勝手掛の主務のほか『寛政重修諸家譜』の編集という大事業を拝命した翌年、正敦は全国測量事業に関わることになつた。周知のように、この事業は忠敬の個人事業として始まり、幕府は「測量試み」として許可と補助金を与えた。

第一次、第二次測量は蝦夷地関連事業ゆえに蝦夷掛と交渉を要し、勘定改役鈴木甚内、徒士目付細見権十郎から辞令書のようなものが交付された。第三次測量からは天文方を総括する若年寄であるといった。

しかし一方、幕府の後ろ盾が強力になるにつれて忠敬ら一行の態度も尊大になり、現地の村役人らとの摩擦が増えたとの指摘もある。第四次測量では「糸魚川事件」が起きて忠敬らは勘定所に訴えられた。また第五次測量では隊員が不祥事を起こし、正敦の指示によつて内弟子の平山郡藏らが破門された。これらは偶発的なものではなく、起こるべくして起きたという見方もされている。

測量行が回数を重ね、次第に作業がシステム化されて安定すると、指揮監督は天文方の高橋景保に任され、正敦が表面に出て来ることはなくなつていった。



松平定信像 福島県立博物館蔵

第一次から第四次測量の結果は文化元年八月に『日本東半部沿海地図』として上呈、九月六日に終結果である『大日本沿海輿地全図』は文政四年七月十日に上呈、孫の伊能忠誨と下役らが江戸城大広間に大図・中図・小図を展示し、老中、若年寄が閲覧した。しかし、將軍の上覽はなかつた。褒賞も天文方までで幕閣の褒賞はなかつた。改暦事業では老中や若年寄にも褒賞があつたことと比べると、測量事業は改暦事業より下位の位置づけだつたようである。

### ○琵琶湖図 文化二年（一八〇五）51歳



『近江名所図会』堅田満月堂（浮御堂） 国立公文書館蔵

伊能図の中に大縮尺で絵画風に描いた美麗な琵琶湖図がある。

文化二年閏八月、伊能隊が第五次測量で琵琶湖の周囲を三十八日間もかけて測量し、仕立てたものである。幕府要人や知友への謹呈用に作られたといわれる。もしそうであれば、謹呈の相手方として最もふさわしいのは測量事業の統括者であり、近江堅田の領主でもあつた正敦であろう。

堅田は近江八景「堅田落雁」で知られる景勝の地であるが、正敦は一度も国入りしなかつた。堅田藩では藩主も家臣も江戸に在住し、必要人数の家臣だけを堅田に派遣していたからである。藩主でありながら国元に行つたことがない正敦のために、景保がこの図を作らせたとも考えられる。

なお、景保に琵琶湖測量の苦労を訴える忠敬の

**○堅田藩士・山田聯（一七八一一一八四六）**

堅田藩士山田聯（通称・綱治郎、綱次郎）は堅田藩の儒者であり、北方図の作製で知られる地理学者でもあつた。堀田摶津守の臣下として伊能忠敬の地図事業に関与し、地図の貸借などで忠敬の『江戸日記』にしばしば登場している。また私的な交際もあつたようで、忠敬あての借金依頼状が世田谷伊能家に残されている。「借用金残り五両、拝借懇願 町方・同心・藩中に頼めば、請人必要にして、藩へ外聞よろしからず」（文化十二年二月二八日付）という内容である。なお、高橋景保は山田聯の北方図に関する説に甚だしい誤謬があるとして、『間重富宛の書簡の中』で山田を「遍癖」「凡愚癖頑」「狂人」等と酷評している。

**○蝦夷地御用 文化四年（一八〇七）53歳**

文化四年、ロシアによるエトロフ島襲撃事件が起き、幕府は指揮官を派遣し現地を巡査させるこ

書簡が残されている。湖畔の芦原は堅田の雁の恰好の住処だったが、湿地帯のため測量隊は大いに難渋したのである。

### ○仙台藩の後見 寛政元年～文化九年 35～58歳

仙台藩は大藩であるうえ、北方防衛の点においても、江戸を支える仙台米の产地としても、幕府にとって重要な藩であったが、伊達重村が藩主のとき仙台藩の内政は治らず、家中から幕府へ「御療治」を願う動きが度々あつた。『よしの冊子』に定信が正敦に仙台藩の藩政に関与させたところ改善されたので、ご褒美に大番頭に取り立てたところ、その後、重村を隠居させ、若年の斎村を藩主に据えて正敦に後見させた顛末が述べられている。

このあとも仙台藩では藩主の夭折が続き、正敦は文化九年まで二十数年間も幼年藩主を戴く仙台藩の後見役を勤めた。後見と言つても特に藩政に介入することはなかつたが、正敦が後見することで内外に安心感を与える効果があつたといわれる。寛政年間に企てられた「さむらい一揆」（因窮家臣の一揆）は、願いが聞き入れられなければ江戸に登つて正敦に直訴する、という内容であつたといふ。正敦が藩の上層部はもちろん、藩政に不服を持つ家臣たちの信頼をも集めていたことがわかる逸話である。

なお、正敦は病弱だった佐倉藩主堀田正愛を輔佐して、一時佐倉藩の後見もしている。

とにした。老中らの論議で、指揮官の人選が行われたが、老中・牧野備前守が「依頼するとしたら仙台藩が最も適任である。藩主（伊達重村の孫・周宗 当時十二歳）は幼いけれども堀田正敦はその叔父である。これを指揮官にすれば、仙台の家士（従軍家臣）もまたこれを敬い尊重するであろう」

『東藩史稿』と発言し、これが了承された。六月、五十三歳の正敦は蝦夷地に出発した。仙台藩医桑原如則が侍医として随行したことは周知通りである。なお『甲子夜話』の記事によると、この巡回は仙台藩、会津藩の軍勢十五、六百人と医師五人、大砲も数多く従えた大行列だったという。若年寄の重職にあつた正敦を危険な紛争地に派遣したことには疑問を感じざるをえないし、また仙台藩主の叔父（大叔父）である、という理由はこじつけのようにも思われるが、それだけ正敦への期待と信頼が厚かつたということであろう。

正敦は若年寄を四十二年務めたが、他の人々も在職年数が長かった。老中・松平信明は在職通算二十八年、林大学頭述斎は四十七年、将軍家斉は在位五十年、隠居後も実権を握り続けて「大御所

時代」と呼ばれたが、その期間を含めると、なんと五十四年間となる。江戸時代が二百六十数年間であることを考えると、驚異的な数字といえるのではないだろうか。

### ○正敦の私生活

正敦の職務の質と量を考えると、余暇の時間はほとんどなかつたように思われる。しかし実際は少ながらぬ著書があり、また『觀文禽譜』という大作も著した。正敦は幕閣となつてからも「お城から退出して帰宅後も必ず書物を手にし、あたかも老学究のようであつた』（『松前紀行』解題）と伝わる。また「壯年になつてから服部栗齋について学問を学び、その傍ら皇國史典を好み、文章と和歌を善くし、寛政名臣でも最も優れた人であつた』（族譜稿、族譜、東藩史）ともされている。余暇は学問に費やしていたようである。

一方、正敦は松平定信を中心としたサロンで学術や文芸を楽しんだ。定信は築地（現・築地市場）の下屋敷に浴恩園という庭園を所有しており、そこで正敦ら同好の士とともに文学や風流の道を樂しつんだ。『甲子夜話』には定信が他界した時の正敦の落胆が甚だしかつた様子が記されている。

蝦夷地巡回に際して定信に仙台藩の後見を託したのも親しさと信頼のあらわれであろう。正敦が最も敬愛し、信頼したのは定信だったと思われる。松平信明が病気で死去すると、これを境に幕府の力を及ぼし続けた。

### ○寛政の遺老

松平定信は天明七年に老中首座となつて寛政の改革を開始したが、六年後の寛政五年に老中を辞任した。しかし代わつて老中首座に就いた松平信明をはじめ、定信に抜擢された幕閣らによって定信の改革路線は引き続き実行され、文化十四年までおよそ二十四年間継続された。これら改革を継続させた幕閣は「寛政の遺老」とよばれた。定信は辞任後も彼らと親密な交流をもち、幕政に影響力を及ぼし続けた。

正敦は若年寄を四十二年務めたが、他の人々も在職年数が長かった。老中・松平信明は在職通算二十八年、林大学頭述斎は四十七年、将軍家斉は在位五十年、隠居後も実権を握り続けて「大御所

勢力図が大きく変化した。

信明と入れ変わって老中格になつたのは將軍家斎の寵臣・水野忠成（一七六二—一八三四）であった。忠成は側用人であつたが老中格を兼ねて勝手掛を担当し、正敦は褒賞を与えられて勝手掛を罷免された。以後、忠成は死去の年まで十七年間も老中首座・勝手掛を勤めることとなつた。

忠成は田沼意次の子・意正を若年寄に取り立て腹心となし、將軍家斎から政治を委任されて専権をふるつた。側近に政治を委ねて家斎は奢侈にふけり、政治は腐敗して田沼時代以上の賄賂と請託が横行、世人はこれを「水の出てもとの田沼になりにけり」と諷刺したという。

### ○シーボルト事件（文政十一年）正敦 74歳

文政十一年、「寛政の遺老」も老齢となつて辞任する者や死去する者が相次ぎ、残るは正敦ただ一人となつていた。そのような時期に「シーボルト事件」が起きた。

天文方高橋景保は定信グループの中では四十四歳とまだ若く、外國語能力や天文学、地理学等の専門知識を持ち、御書物奉行の要職にあつた。特に对外政策においては幕政を主導する発言力を持つ実力者だったが、国禁の地図を外国人に渡した罪で逮捕され、翌年獄中で病死した。終始景保を取立ててきた正敦だが、このときすでに七十四歳。閣内の同志も去り、もはや水野忠成政権の下で景保を庇護する力はなかつたようである。

○『觀文禽譜』天保二年（一八三二）頃 76歳  
正敦の著作のなかで最も著名なのは鳥類図鑑『觀文禽譜』『禽譜』である。

この書は数種が伝わるが、一例をあげると四三八種の図譜および解説文十二冊で構成される。質・量ともに江戸時代最大の鳥類図鑑とされる。図は自家の所蔵図のほか諸大名や学者等から転写して絵師に原寸大に描かせ、解説文は正敦が記述した。この書は我が国の本草学の一頂点を示すものとされるが、同時に解説文として和漢の古典から膨大な作品を引用・掲載しており、「鳥の歌学書」というべき側面をもつと評されている。

蝦夷地の鳥も収録されており、正敦の学識と知見、および広範な交友関係を活用して編纂されたものである。博物学の『本草綱目』例に習って鳥を分類し、解説文を加えたものであるが、若年寄就任直後頃から着手し、最終的には辞職の前年の天保二年に完成したとみられ、ほぼ在任期間の四十年間にわたる、まさにライフワークというべき大著である。正敦の仙台在住時代の回想的記述も多いことから、若い頃から鳥に関心があつたことがうかがわれるという。もとは堀田家の鼻祖正高の遺図を草本とし、実父宗村の遺志をも汲む形で鳥の解説を記したのが始まりであると自序に述べられており、徐々に内容を増やし、補い、深めていったといわれる。

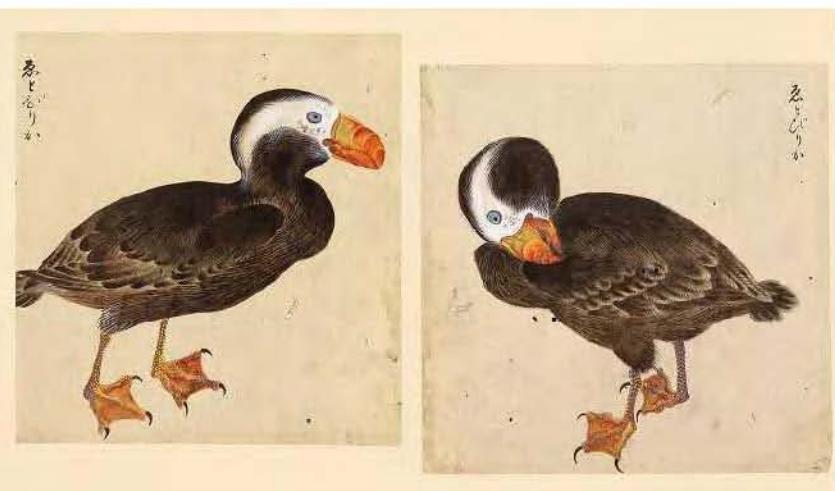
なお、本書の画像は宮城県図書館、国立公文書館、国立国会図書館、東京国立博物館のWebで見ることが出来る。また、本書を基に編纂された『江戸鳥類大図鑑』が平凡社から刊行されており、図書館などで閲覧できるので、ぜひ一覧されたい。

### ゑとびりか

或ヒルカト云モ俱ニ

蝦夷方言

頭は鶲鷗（オシドリ）のようで全身黒色、鳥（カラス）のようだ。嘴（くちばし）は丹（あか）くて鶲哥（インコ）の嘴のようだが扁平で大きく先が少し曲がっている。エトロフ島の周辺に多い。



『禽譜』ゑとびりか 宮城県図書館蔵

寛政の初年に蝦夷へ巡回した者がその頭部だけ持ち帰つて贈つてくれた。同五年秋八月、また全身の皮を剥いだものを贈られた。その形状は思うに善知鳥の種類であろう。蝦夷の方言で良いということをビリカといふ。良い日和ということをビリカトフカブといふ、凪の良いことをストビリカといふ。だからエトロフ島の良い鳥というのを略してエトビリカと称したのであろう。

〔頭注〕○蝦夷の女はこの嘴をいくつも繋いで髪の飾りとする。(※この情報はゴロウニン『日本幽囚記』に記載されているものという。)



『觀文禽譜』表紙



解説文 ゑとびりか

国立公文書館蔵

## ○正敦の家族と周辺人物

正敦の五男の正衡は藩主となり、また父と同じく若年寄をつとめた。正衡は絵を善くし、正敦を助けて『観文獸譜』『観文介譜』を著した。二男の敬顯は奥州一関の田村右京太夫の養子となり、田村宗顯と名乗った。また、甥に『雪華図説』の著者で大塩平八郎の乱を平定した事蹟で知られる古河藩主、老中の土井利位がおり、土井家の家老には著名な蘭学者・鷹見泉石がいる。また、明治初期の代表的洋画家である高橋由一は文政十一年、佐野藩士高橋源十郎の嫡子として江戸大手前の藩邸内で生まれたという。藩主正衡の近習となり、のち図画取扱も勤めた。

このほか正敦と交際があつた人物としては仙台藩医工藤平助、大槻玄沢、桑原隆朝純、奥医師・桂川家歎代、平戸藩主・松浦静山、林大学頭述齋、正敦が京都から招いた本草学者・小野蘭山、国学者・屋代弘賢、歌学方・北村季文、画家・谷文晁、儒学者・尾藤一州、等々枚挙に暇がない。正敦は学者や文化人を保護し、また自ら文化文政文化を開かせたとも言える。

## ○老中を辞退する

正敦が老中に推挙されたが断つたという逸話が『松前紀行』解題にみえる。「西の丸の閣老が欠けたので某閣老が正敦を後任に充てよう内意を問うたところ、正敦は辞退して「私は常に忠誠を以て分を守り、樂翁氏（定信）の推挙を辱めないことを願つてきた。今はもう樂翁氏の時代ではない。私が高齢だというだけで建言が聽かれるだろうが、それは天下のためにならないし、私の意思ではない」として峻拒したという。

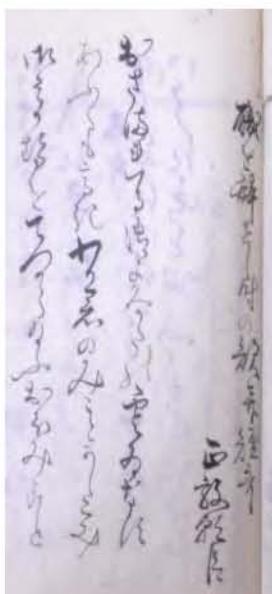
## ○辞職の歌

辞職に際して正敦は、將軍手ずから佩刀を賜つた。その嬉しさと感謝を長歌に詠んでいる。仕事を愛し長年にわたつて勤め上げ、安定した治世が実現できたことを喜ぶ正敦の心情もじみ出しているように思われる。

### 職を辞せし時の歌并短歌 正敦

おさまれる御代のひさ堅の雲井なす、あふぐも高き我君の、みことかしこみ御はかせを、てづから賜ふおほみこと、何といはねの下草も、もえ出る春の心地して、空を仰ぎつぬかづきつ、朽残りたる老が身に、恵の露のかけまくも、あやにかしこあふせごと、かうぶることの嬉しさは、みじかき筆に尽されず、深き流の水茎も、いかで及ばむ幾度か、思ひ出つゝ朝な夕な、この世を忍ぶおもひ出にせむ

国立公文書館蔵

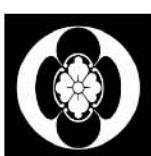


## ○正敦の晩年と墓所

正敦は天保三年（一八三二）一月二十二日、辞職を願い出した。許可が出たのは早くも同月二十九日、かつて「吹毛の刃」と称され、再三の辞職願い

も許されなかつた正敦だが、晩年はかなり老衰が進んだようである。「堀田老侯は四十年余も若年寄を勤めたが、年老いて歩行も難渋し、記憶も衰えたからと、この春隠退を願い出て、首尾よく願いが聞き届けられた。退職の日は、特別の恩召しで將軍御手づから御脇指を下された。これほど長らく精勤した若年寄はいないなどと世人は言い合つた。御脇差を賜ることは重々しいことで、たやすいことではない。將軍の格別の「恩寵だ」という評判である」（『甲子夜話』）とある。ちなみに、晩年の書跡から、脳軟化症を患つていたとも言われている。

辞職後、官邸から麻布広尾の邸に移り住み、惣髪して水月と称した。嫡子の正衡に家督を譲り一万六千石を継がせたが、辞職から半年も経ない六月十九日（十六日とも）に没した。数え七十六歳。謫号は「報國院水月無染大居士」。江戸渋谷（現・渋谷区広尾）香林院（族譜稿には渋谷祥雲寺中景德院とする）に葬られたが、その後、墓は昭和三十年代に青山墓地に移されたという。現在、青山霊園内にある大名墓の中には堀田家の墓は見当たらぬ。整理されて現代風の墓石になつていているともいわれる。広大な青山霊園で堀田家の墓所を探すのは困難であるが、もし墓石に家紋が彫つてあるとしたら手がかりにはなるだろう。堀田家の紋は「丸に堅木瓜」、世に「堀田木瓜」と称されている縦長の紋である。



堀田木瓜

【参考】◇堀田正敦の出生年について◇

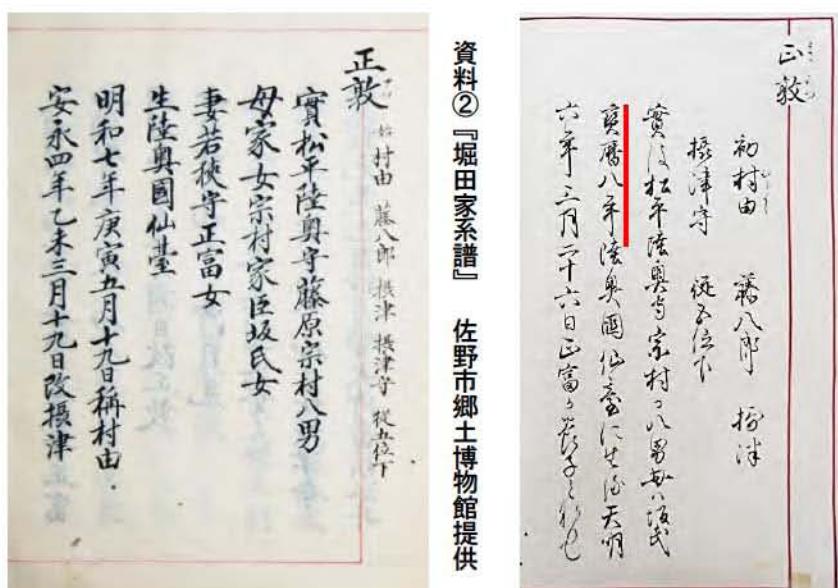
堀田正敦は通常、「宝暦五年に仙台藩主伊達宗村の人男（六男とも）として生まれた」とされる。例をあげれば菊田定郷編『仙台人名大辞書』は伊達氏の「族譜」「族譜稿」「東藩史稿」を参照のうえ、「宝暦五年七月廿日仙台に生る、宗村公の第六子」としている。また徳川幕府の『続徳川実記』も「陸奥国松平伊達宗村が八男」天保三年（一八三二）六月に死去したので、数え年七十七歳に一ヶ月どどかず、七十六歳となる。

しかしながら、正敦が自ら編纂した『寛政重修諸家譜』には「松平陸奥守宗村が八男」「宝暦八年（一七八〇）陸奥國仙台に生る」と明確に記述されている（資料①）。吉川弘文館『国史大辞典』もこれに拠つてか「陸奥仙台藩主伊達宗村の八男」「宝暦八年（一七八〇）生まれる」としている。

江戸時代には実際の出生年と違う届出がされることはあることがあることだった。しかし、ここで問題になるのは、もし正敦が宝暦八年生まれだとすると、「伊達宗村の人男」とすることに矛盾が生じることである。宗村は、宝暦六年五月に死去しているからである。

あるいは、考え難いことではあるが、編纂時に書き間違えた可能性もある。そこで堀田家が幕府に提出した『寛政重修諸家譜』呈譜の控を見ると、なぜか出生年が書かれていらない。呈譜の資料となつた『堀田家系譜』（資料②）も控と同内容で、やはり出生年がない。藩主の経歴は出生年が必記事項だが、正敦の出生年は系譜に記録されず、幕府

にも提出されなかつたようである。では『寛政重修諸家譜』の編纂者は何を根拠に「宝暦八年」と記述したのだろうか。あるいは正敦の指示があつたのだろうか。『寛政重修諸家譜』は事実確認を慎重に行いつつ編纂されたといわれる。その総裁であつた正敦自身の生年が「宝暦八年」と記述されている事実を軽視すべきではないと思う。そこに正敦の何らかの意思が込められているようにも思えるからである。(丁)



資料②『堀田家系譜』  
佐野市郷土博物館提供

## 【参考文献】

- 『続徳川実記』『国史大事典』　吉川弘文館　　続群書類從完成会

『伊能忠敬測量日記』佐久間達夫　　大空社

『仙台人名大辞書』　　宝文社

『宮城県人物誌』　今泉・宇野　歴史図書社

『仙台市史』通史編5近世3別編2　仙台市

『佐野市史』佐野市史編纂委員会　佐野市

『隨筆百花苑』八巻・九巻　中央公論社

『甲子夜話』松浦静山　東洋文庫　平凡社

『字下人言』松平定信　松平定晴　松平定晴

『むかしばなし』只野真葛　東洋文庫　平凡社

『伊能忠敬』大谷亮吉　岩波書店

『伊能忠敬』小島一仁　三省堂選書　三省堂

『故従五位下堀田攝津守正敦公御履歴』舊果会

『堀田氏と佐野領』　佐野市郷土博物館

『鳥の殿さま』佐野藩主　堀田正敦　〃

『松前紀行』『閑之末日記』　仙台叢書刊行会

『伊達世臣家譜』　　〃

『堀田正敦の『観文禽譜』』鈴木道男　東北大

『江戸鳥類大図鑑』堀田正敦　鈴木道男　平凡社

『伊能忠敬未公開書簡集』　伊能忠敬研究会

『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書』　〃

『江戸時代史』三上参次　講談社学術文庫

『江戸人物科学史』金子務　中公新書

『江戸幕府の政治と人物』村上直　同成社

『江戸幕府の日本地図』川村博忠　吉川弘文館

『天文暦学諸家書簡集』上原久編　講談社

『堅田藩の家臣と職掌』郡山志保　堅田大庄屋

『仙台藩の蝦夷地出兵と軍陣医学』日本医学史　文書研究会　第三回報告会

〈随想〉 秀藏の返歌

伊能楯雄

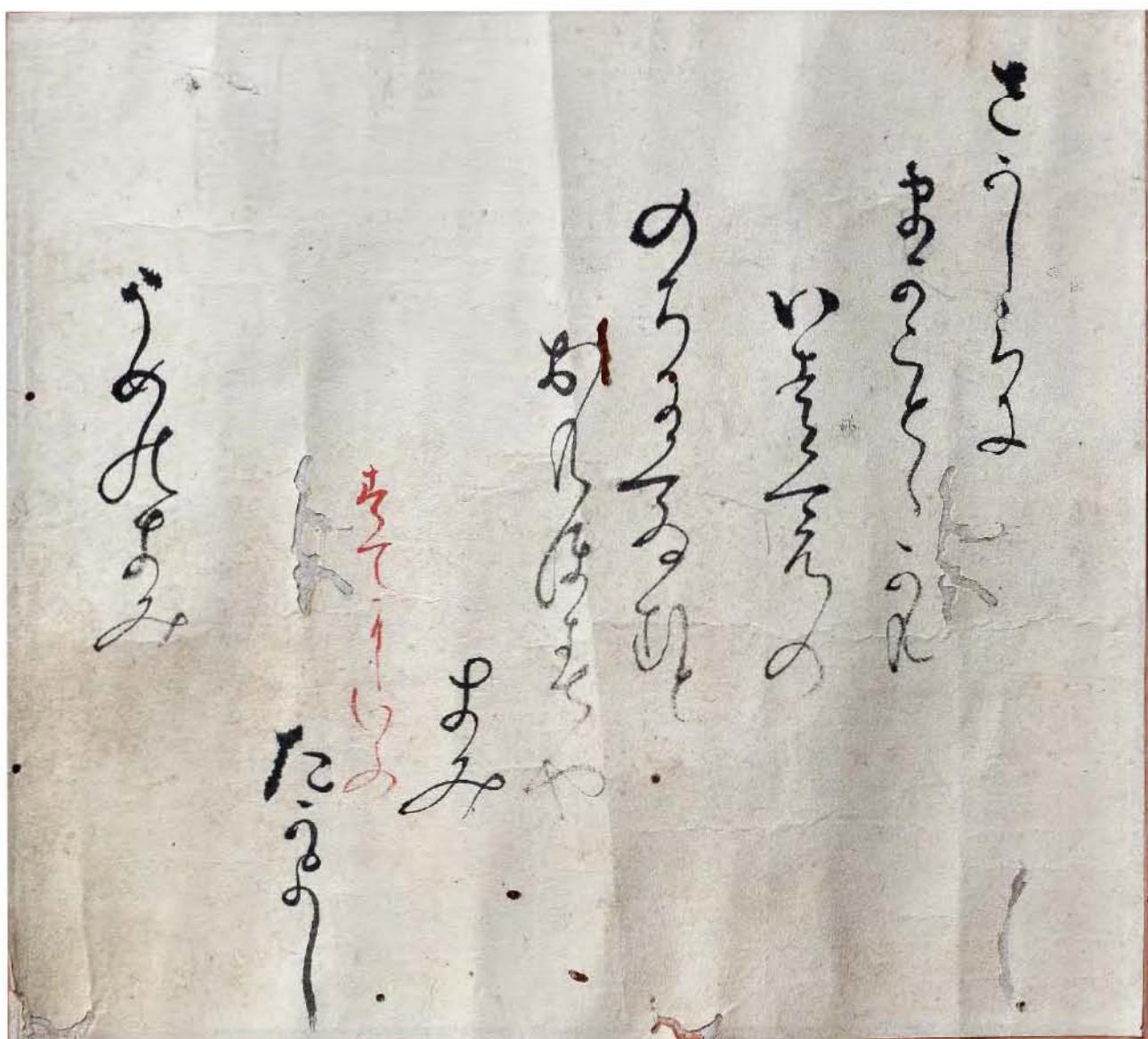
伊能忠敬の次男・秀藏（別名 敬慎）の歌が我家に伝えられている。  
一五センチメートル×一六センチメートルの  
料紙に、仮名のみの連綿体で書かれている。

さかしらに  
まがこととかも  
いはくへの  
のちにくいむと  
おもほすや  
きみ  
すべてにいふ  
たかよし  
うめのきみ

この歌は、秀藏を気遣う「うめのきみ」なる人  
への秀藏の返歌だと想える。

利口ぶつて

（あのことは）禍事だつたのではなどと  
(いはくえ：悔いにかかる枕詞)  
いまになつて後悔しているのではないかと  
お思いでですか（そのようなことはありません）



秀藏の和歌（自筆文書の写真・ほぼ原寸大）なかなかの達筆ぶりである。

(すでにいふ…はつきりと申しあげます)  
たかよし(敬慎)うめのきみ

「このような意味合いであろうが、いつたい「まがご」とは何を言つてゐるのである。

文化十二年四月二七日、(第九次)伊豆八丈測量の一行が出立する日のこと。秀藏は、忠敬から看病留守居のため家に残るよう命じられたのだが、近所まで送つていくと言いおいて、尾形謙治や伊能七左衛門等とともに品川まで出かけてしまう。謙治等は夕刻四時頃帰つたが、秀藏ひとり夜中の十二時頃、願酒を破り酔つて帰宅、詫びの言葉もなく寝入つてしまつた。



この数日後、桑原隆朝宅を訪れた秀藏は、ここに置いてほしいと頼みこんだが、亀島に戻りたいとも、又、過ちを改める言葉もなかつたという。隆朝は忠敬の考えを聞いたうえで、その頼みを断り、その後秀藏は姿を消した。

秀藏は、忠敬の次男として生まれたが庶子であり、亡き正妻の子で一〇才年上の長男景敬が、伊能家を引継いでいた。

秀藏十五才のとき、父忠敬の供をして(第一次)蝦夷地測量に同行する。五才年上の従兄弟・平山宗平もいっしょである。続いて、第二次からは宗平の兄郡藏も加わり、第三次・第四次には宗平に代わり同年の尾形慶助が加わつた。皆よく忠敬を助けた。第一次から第四次まで四カ年間の成果は、「日本東半部沿海全図」として完成、享和四年九月、將軍家斉公の閲覧するところとなつた。忠敬は十人扶持を仰せ付けられた。

翌日、忠敬は、「これまでも度々諭してきたが、謝りの一言も改めの一言もない。このような不法不埒は許さない」と、秀藏を追い払つてしまつた。

「右悪者追払無人ニ候得共万々一下向候共御地へ下向等ハ有之間敷候得共万々一下向候共家内へ入候儀ハ御無用ニ候」と、佐原本家とも縁を切らせた。秀藏は勘当された。この時、秀藏二十六才である。

さて、「まがご」とが、这一件だとすると、秀藏は、追い払われたことを後悔していなかつたといふことになる。さらには、いざれ忠敬の元を離れなければならないと考えていたのではないかとも思える。

この数日後、桑原隆朝宅を訪れた秀藏は、ここに置いてほしいと頼みこんだが、亀島に戻りたいとも、又、過ちを改める言葉もなかつたという。隆朝は忠敬の考えを聞いたうえで、その頼みを断り、その後秀藏は姿を消した。

秀藏は、忠敬の次男として生まれたが庶子であり、亡き正妻の子で一〇才年上の長男景敬が、伊能家を引継いでいた。

文化八年十一月、第八次(九州第二次)測量を前にし、忠敬は秀藏を桜井家へ婿養子に出した。二年半に及ぶ第八次測量中、江戸に住む(桜井)秀藏は、深川宅の管理や八丁堀亀島辺へ転居するための手筈を任せられていた。

文化十一年五月二十一日、忠敬帰府、十日後の六月三日亀島(桑原隆朝邸跡)の新居に移ることができた

十一月二十八日、秀藏が亀島の家に引き移つてくる。(桜井家を離縁になつてのこと、桜井家での生活わずか三ヶ年余であった)しかし、亀島での秀藏の仕事は、忠敬の身の回りの世話など内向きのことに限られ、御用向きのことは年下の箱田良助や保木敬藏が担つていた。

翌年四月の第九次(伊豆八丈)測量に際しても、秀藏は留守居役、せめて品川までもと測量隊に同道した。そして前述したように、勘当の身となつてしまつた。

次に、この返歌の受け手である「うめのきみ」についてである。想像するに、この人物は、分家の伊能七郎右衛門豊秋(忠敬入婿時の伊能家の後見

第五次測量の途上、忠敬が病氣により隊を離れていた際のこと、弟子たちの間に、追々気が緩み御用を権威に不取締りの行為があつた。藩主から、このことを伝え聞いた天文方高橋景保から忠敬に対し訓戒書がとどけられた。この一件の始末は、内弟子に対し厳しいものとなつた。郡藏は破門、秀藏、門倉、尾形は謹慎とされた。

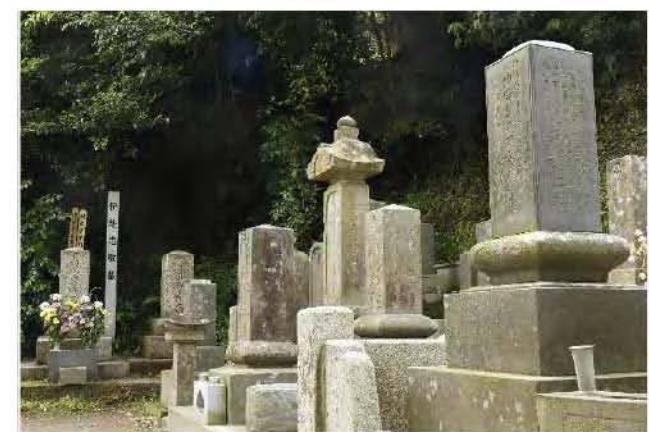
文化五年、第六次では、天文方に気遣つてか、稻生秀藏として加えられたが、途中大阪にて病氣のため佐原村へ帰された。そして以降秀藏が測量隊に加えられることはなかつた。

文化八年十一月、第八次(九州第二次)測量を前にし、忠敬は秀藏を桜井家へ婿養子に出した。二年半に及ぶ第八次測量中、江戸に住む(桜井)秀藏は、深川宅の管理や八丁堀亀島辺へ転居するための手筈を任せられていた。

人の長男・勝次郎（別名 忠闇、鳳後）であろうと考える。秀藏より二十七才年長、父豊秋死後、家を継ぐが、俳句や和歌に没頭するようになり、家事を顧みなかつたため、三十一才の時に追放され久離人の身となつた。やがて、妻の実家のある潮来村に草庵を構え、自適な生活を送る傍ら、弟子たちに和歌や俳句作りを指導するようになつていった。潮来村の古刹・長勝寺には、本堂前の源頼朝公お手植えと伝えられる梅の古木に並んで彼の句碑が立つている。弟子たちによつて建てられたものであるが、鳳後（勝次郎）自ら選句し揮毫したのであろう。

### この花や そもそも鎌倉の鐘の銘 鳳後

（文化十一年戊午仲冬 筆第建）



忠敬と秀藏（神保玄次郎）の墓  
佐原・観福寺



（筆者）伊能七郎右衛門家當代

（終）

少年時代の秀藏は、父豊秋とともに本家の伊能家に出入りしていた勝次郎とは面識があつたはずである。二十六才になつたばかりで伊能家との縁を切られ行き場のなかつた秀藏が、潮来の草庵に住む久離人・勝次郎（ここでは「鳳後」と名乗つていた。）の元を訪ねたのではないだろうか。今や同様の身の上の二人である。秀藏にとつての「うめのきみ」は、「うの梅や」の句の勝次郎であると想う。

また、秀藏の歌の書かれたこの料紙が、忠敬が秀藏に宛てた書簡四通とともに、勝次郎の子孫である伊能七郎右衛門家に伝えられていることを考へると、この歌は勝次郎に送られたものとして間違ひなさそうである。

併せて、父忠敬の書簡をも託したことと思うと、歌の終わりに朱書きで付加されている「すでにいふ」という文字に、秀藏の決意が込められているように思える。

さて、この歌がいつ頃のもののかは判断できないが、勝次郎の気遣いへの返歌とすれば、勘当されて（文化十二年）間もない頃とみてよいであろう。

秀藏のその後の消息は、不明であるが、九年後の文政七年、神保玄次郎と改名した秀藏が、佐原に下り、数日滞在の後江戸に帰つたことが確認される（忠誨の日記）。その後いつの頃か、佐原に戻り村人に書や算術を教え暮らし、天保九年、五十四歳で死去した。二十六才で父忠敬と離別した秀藏であるが、その墓は佐原・観福寺にある忠敬

の墓から五メートル程の場所に建てられている。十五才で父忠敬に同行した蝦夷地測量（第一次以来の秀藏のことを思い、また、同年代でありかつて共に歩んだ尾形謙一郎（後に天文方手付下役）や箱田良助（後に勘定方）と比べると、その後の人生は、やはり不運である。本人の身からでた鋤なのか、忠敬の厳格な気性によるものなのか、いずれにせよ秀藏が氣の毒に思えるのである。

（余談）

「敬慎」（たかよし）とは、忠敬が名付けたのか、勘当されて後、秀藏自ら名乗つたのかは判らないが、「敬慎」とは、つつしみぶかいこと、また、「礼記」には「敬慎者仁之地也」とある。

秀藏は本当の「敬慎」であったのか…と想つた。

資料

## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】

(九州第一次 上鴨川村～深川黒江町)

自 文化8年3月7日 至 文化8年5月9日

宿泊日 旧暦 (西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	天体観測		大図番号
				百姓嘉右衛門	社村より上鴨川村迄測る。恒星測定	
7 * ( 29 )	上鴨川村	同	加東市	庄屋武右衛門	三木上町より大戸田村迄測る。	一三六
7 * 【支隊】	淡河町	同	神戸市北区	庄屋市右衛門	大戸田村より淡河町迄測る。	一三六
8 * ( 30 )	上相野村	同	三木市	百姓利兵衛	上相野村迄測る。恒星測定	一三六
8 * 支隊中食	屏風村字辻	同	神戸市北区	庄屋篠兵衛	淡河町より屏風村字辻迄測る。	一三六
9 * ( 5. 1 )	三田本町	同	三田市	本陣兵衛治郎左衛門	上相野村より福島村にて中食し三田本町迄測る。	一三六
9 * 【支隊】	湯山町登町	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	湯山町追分より西尾村字五社迄測る。湯山町追分より登町を歴て鼓ヶ滝迄測る。登町より船坂村界白水川迄測る。	一三六
10 * ( 2 )	三田本町	同	三田市	神田惣兵衛	庄屋川崎宇右衛門	一三六
10 * 【支隊】	湯山町登町	同	神戸市北区	本陣兵衛治郎左衛門	上相野村より福島村にて中食し三田本町迄測る。	一三六
11 * ( 3 )	上山口村	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	湯山町追分より西尾村字五社迄測る。湯山町追分より登町を歴て鼓ヶ滝迄測る。登町より船坂村界白水川迄測る。	一三六
11 * 中食	湯山町登町	同	神戸市北区	本陣兵衛治郎左衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
12 * ( 4 )	中山寺村	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
12 * 【支隊】	小浜町	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
12 * 支隊中食	生瀬村大立川	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
12 * 支隊休	池田本町	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
13 * ( 5 )	多田院村	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
13 * 中食	中山寺村	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
14 * (- 6 )	大山崎	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
伏見上油掛町	瀬川村	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
京都府京都市	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
新庄屋九右衛門	高楓屋五兵衛	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
無測	同	神戸市北区	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	庄屋川崎宇右衛門	一三六
			年寄伝藏	三田本町より平田村三田追分碑に繋ぐ。 上山口村より三木三田追分碑に繋ぐ。 測る。	三田本町より平田村三田追分碑に繋ぐ。 上山口村より三木三田追分碑に繋ぐ。 測る。	一三六
			本陣兵衛治郎左衛門	生瀬村大立川より武庫川を渡り安倉村枝東口追分迄測る。	生瀬村大立川より武庫川を渡り安倉村枝東口追分迄測る。	一三六
			庄屋川崎宇右衛門	船坂村界白水川より生瀬村大立川迄測る。	船坂村界白水川より生瀬村大立川迄測る。	一三六
			脇本陣木下吉左衛門	東口追分より中山寺村仁王門前を歴て中筋村迄測る。枝東口追分より中山寺村仁王門前を歴て中筋村迄測る。	東口追分より中山寺村仁王門前を歴て中筋村迄測る。枝東口追分より中山寺村仁王門前を歴て中筋村迄測る。	一三六
			庄屋旗兵衛	本隊、湯山町より無測にて中山寺へ着。	本隊、湯山町より無測にて中山寺へ着。	一三六
			大和屋大三郎	多田院村より満願寺境内を歴て猪名川を渡り多田院村迄測る。	多田院村より満願寺境内を歴て猪名川を渡り多田院村迄測る。	一三六
			大和屋大三郎	多田院村より満願寺境内を歴て猪名川を渡り多田院村迄測る。	多田院村より満願寺境内を歴て猪名川を渡り多田院村迄測る。	一三六
			梶山市三郎	池田本町より瀬川村追分迄測る。	池田本町より瀬川村追分迄測る。	一三六
			高楓屋五兵衛	下川辺外三名総持寺へ立寄。	下川辺外三名総持寺へ立寄。	一三六







宿泊日・旧暦		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測	
21	20*	19*	18*	17*	16*	15*	14	13	(西暦)
(11)	小休	台ヶ原宿	教来石宿	金沢宿	木船新田村	新倉村	上諏訪宿	[支隊]	百姓庄右衛門
同北杜市	同	山梨県北杜市	同	茅野市	同	富士見町	諏訪市	[支隊]	本陣年番名主所兵衛八
牛丸屋弥源治	本陣小松伝右衛門	問屋河西六郎兵衛	本陣白川嘉右衛門	本陣有賀源右衛門	油屋佐吉	庄屋左太夫	小平平右衛門	【支隊】	右衛門
柏屋平右衛門	柏屋平右衛門	金沢宿より鳥木宿迄測る。恒星測定	桑原村字立縄手追分より木船新田村迄測る。	新倉村より無測花園村より乗船	平出村より鮎沢村鮎沢橋迄測る。	御堂垣外駅より金沢峠を歴て金沢宿迄測る。	御堂垣外駅	【支隊】	本陣問屋弥治兵衛
着。	教来石宿より台ヶ原宿迄測る。支隊は金沢宿より無測にて	教来石宿より金沢宿入口迄測る。	木船新田村より金沢宿迄測る。	木船新田村より富士川の源流、釜無川を渡り山口御関所を歴て	九六	九六	九六	【支隊】	年寄源助
	九八	九八	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八	伊奈部駅	喜左衛門
	同	同	同	同	同	同	同	同	飯島村飯島町
	同	同	同	同	同	同	同	同	飯島町
	同	同	同	同	同	同	同	同	宮田町
	同	同	同	同	同	同	同	同	飯島村飯島町
	同	同	同	同	同	同	同	同	本陣問屋弥治兵衛
	同	同	同	同	同	同	同	同	忠敬外五名、無測量にて飯島町着。支隊、大島町より本郷
	同	同	同	同	同	同	同	同	村字査掛を歴て飯島村飯島町迄測る。恒星測定

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		天体観測	
2	*	1		文化8年5月		24	23	*	22	21	20
【支隊】	(6.22)	先手中食	後手中食	犬目駅	猿橋駅	黒野田駅	駒飼宿	中初狩宿	中初狩宿	山梨県甲州市	
同	大月市	同	大月市	同	大月市	同	大月市	同	大月市	同	大月市
本陣源右衛門	本陣源右衛門	本陣藤左衛門	本陣天野屋八左衛門	本陣奈良奥右衛門	本陣奈良奥右衛門	伝内	本陣天野屋八左衛門	本陣藤左衛門	本陣天野屋八左衛門	本陣奈良奥右衛門	本陣奈良奥右衛門
上鳥沢村、富士街道追分より大月駅を歴て猿橋村猿橋を渡り	猿橋駅より黒野田駅迄測る。	後手、駒飼宿より笹子峠に繋測。先手、黒野田駅より中初	中初狩宿より桂川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無	測にて猿橋駅へ着。	猿橋駅より黒川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無	測にて猿橋駅へ着。	猿橋駅より黒川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無	猿橋駅より黒川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無	猿橋駅より黒川を渡り大月村、富士街道追分迄測る。無	猿橋駅より塩川及び荒川を渡り上飯田村入口界迄測る。	東南胡村より浅原村釜無川にて別手と会測。恒星測定
九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九八	九八	九八	九八

										宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	天体観測	大図番号
9	8	7	6	5	4	3	（～23）	上野原駅	同 上野原市	同 上野原市	（～23）	上野原駅	同 上野原市	本陣角屋乙助 伊勢屋源右衛門 奈良屋森右衛門	上鳥沢村御靈橋より犬目駅、野田尻駅を歴て鶴川を渡り上野原駅迄測る。	
（～29）	（～28）	（～27）	（～26）	中食	（～25）	小仏駅	与瀬駅	東京都八王子市	神奈川県相模原市 緑区	脇本陣岡本覚五郎	（～24）	中食	（～24）	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛 鯛屋勘治 本陣川口七郎兵衛	上野原駅より字諭訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り与瀬駅迄測る。恒星測定	
深川黒江町	内藤新宿	下高井戸宿	府中番場宿 (本町)	柴崎村字下和田	同 八王子市	同 八王子市	同 上野原市	同 上野原市	後手、小仏駅より上長房字新井、高尾山追分を歴て日小仏御関所を通り日光街道追分、相州川越追分を歴て八王子横山宿を過ぎ新町限迄測る。先手、無測にて上柄田村へ行、高尾山有喜寺中門より高尾山追分迄繋ぐ。	後手、小仮駅より下布田村を歴て下高井戸宿迄測る。	後手、八王子新町限より日野宿を歴て一ノ宮社迄測る。先手、日野宿より玉川を渡り柴崎村字下和田迄測る。	（～24）	中食	（～24）	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛 鯛屋勘治 本陣川口七郎兵衛	上野原駅より字諭訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り与瀬駅迄測る。恒星測定
同 江東区	同 新宿区	同 杉並区	同 府中市	同 立川市	同 年寄元右衛門	同 高尾山追分迄繋ぐ。	同 高尾山追分迄繋ぐ。	同 高尾山追分迄繋ぐ。	同 高尾山追分迄繋ぐ。	同 高尾山追分迄繋ぐ。	（～24）	中食	（～24）	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛 鯛屋勘治 本陣川口七郎兵衛	上野原駅より字諭訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り与瀬駅迄測る。恒星測定	
忠敬隠居宅	涼野屋長七	名主又右衛門 角屋伊左衛門	本陣玉屋吉右衛門	島屋鉄五郎	松屋忠治郎	本陣高橋三郎右衛門	年寄元右衛門	後手、八王子新町限より日野宿を歴て一ノ宮社迄測る。先手、日野宿より玉川を渡り柴崎村字下和田迄測る。	後手、小仮駅より下布田村を歴て下高井戸宿迄測る。	後手、八王子新町限より日野宿を歴て一ノ宮社迄測る。先手、日野宿より玉川を渡り柴崎村字下和田迄測る。	（～24）	中食	（～24）	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛 鯛屋勘治 本陣川口七郎兵衛	上野原駅より字諭訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り与瀬駅迄測る。恒星測定	
日記記入無											（～24）	中食	（～24）	米屋平助 問屋藤左衛門 青木屋半兵衛 鯛屋勘治 本陣川口七郎兵衛	上野原駅より字諭訪、境川御番所を歴て吉野村小猿橋を渡り与瀬駅迄測る。恒星測定	
九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	（～23）	上野原駅	同 上野原市	同 上野原市	（～23）	上野原駅	同 上野原市	本陣角屋乙助 伊勢屋源右衛門 奈良屋森右衛門	上鳥沢村御靈橋より犬目駅、野田尻駅を歴て鶴川を渡り上野原駅迄測る。	

## 資料

# 多度津藩勘定方日記より幕府測量方関係記事を抜粋

(一)

編集部より

かなり以前になるが、伊能ウオークに関連して地域史料を調べていたところ、機会があつて多度津の図書館を訪問した。伊能関係の地元史料の有無を尋ねたところ、係員の方が大変親切に応対していただき、解説された本史料を見せていただいた。コピーをお願いしたところ、複製して送ってあげましよう、といわれ受領したのが本資料である。その後、矢継ぎばやの各企画にとりまぎれで下積みになってしまい、誠に申し訳ない結果である。

データ化しなければ、と思いつつも時間がたつてしまつたのは慚愧の至りである。そんななかで、会員の中村泰子氏に出会つて膨大な内容をデータ化したのが本史料である。

中味については、以下に記すように柴田勅夫氏の労作である。関係者の目にとまり次の世代に引き継ぐ必要を痛感して、解説も不十分ながら、あえて掲載することにした。忠敬先生没後二百年行事としての伊能測量協力者顕彰会などの指令塔としての業務多端のなかにつき、お許しをお願いいたしたい。

日記はお正月の殿様への賀詞言上から始まるが、多度津藩領の伊能測量に直接関係し、他の地域と多少の違いがみられる部分のみを抜き出して紹介する。

(渡辺一郎)

### 原解読者のまえがき

香川県立図書館収蔵の旧多度津藩関係文書のうち、文化五辰年勘定方日記 上(自正月閏六月) 下(自七月至極月) 二冊には幕府天文方伊能忠敬及び坂部貞兵衛一行十六名による沿岸測量に関する記事が詳細筆録されている。

従来 伊能忠敬一行の測量についての記録としては、高松藩に関しては「鎌田郷土博物館所蔵久米榮左衛門関係古文書 及び 上野瀬平「海岸測量日記」(山田本) 又 丸龜・多度津藩については多度津町武田季雄氏及び山路弘道氏所蔵の大庄屋乃至庄屋の記録」が有名であったが、準備のための書類或は一役職のものとかで、脈絡一貫するものに欠けていた。

然るに本日記は天文方一行の一切の取扱について終始を明らかにするに止まらず、上述諸記録の連結(つながり)を解明するに貢献すること甚だ大いなるべく、このため小生の浅学を顧みず関係部

分を抄出し、読取を行つた次第である。

茲に坂出鎌田郷土博物館員藤田一郎先生 亦小生の微志に深く同情の念を懷かれ、御繁忙の裡を全文に亘り逐一御校閲、御加筆の裡深甚なる謝意を表すものである。

昭和五十一年十一月十一日

柴田勅夫

多度津 文化五辰年日記 勘定方

三月

一 表御郡方左之通

然者測量之儀ニ付阿州表顔役中右 別紙写之通 被申

越候ニ付差進入御被見申候尤着坂日限等 被承合□

聴と者 不致候得共 去月廿日頃可有之哉之旨尚又彼地ニ而両

三日も逗留可有之様子ニ□

候由 尚淡州表到着之上順行之次第 相変候義も

有之候ハヽ早ヽ可被申越旨、申

來候間 此段御承知可被成右為可得御意如此候已上

三月四日 西田三橋

神村 小倉 勝田様

天文測量方御役人被罷越候節取扱向大綱

一 御役人上下人数左之通相聞候

伊能勘解由下役同心

坂部貞兵衛

下河部政五郎

同 青木勝一郎

柴山傳左衛門

外二勘解由召連

家来□

内弟子之者右へ

相籠り

有之候由 都合上下拾六人

右御役人被罷越候節 拙者共之内

壱人国内入込候 初而之於止宿

一應及 挨拶先ゝ之義者 □□

下役之内壱兩人附添申候事

(渡辺注、以下同じ) 拙者共の内一人とは、多度  
津領に入境の際、勘定方から、一人挨拶にでる  
との意味か。

一 夜具之義 惣而 新規木綿  
夜具用意申附候事

(注) 上分と下分に差をつけたところが多いが、  
ここでは差を無くし、木綿で新調としている。  
一つの見識か。

一 湯殿雪隠有懸り相用  
若又無之処者 菓實等ニ而  
仮ニ用意申附候事

一 休泊共盛砂鎊手桶指出  
門前へ者花輪透印附雪  
洞指掛 玄関前へは 宿定紋(カ)  
付雪洞差出し候事

(注) 藩が替われば国が替わったと同じこと。食事  
に上下をつけなかつたところが多いが、ここ  
では上分一汁三菜、下分一汁一采と明白に差  
をつけている。一方で、魚が自由なところは  
適宜に。入領の初日は料理を増やし酒も出せ、  
という。手軽な珍品があれば出すようによく  
ある。

要するに何でもできるのである。ここは藩の  
基本的な考え方を示したもので、近隣と見比べ  
て庄屋レベルでうまくやれ、ということのよ  
うである。

一 逗留中 旅宿近邊火之廻り  
一 郷役人共之内申付候事

一 瀬内屈曲之大綱丁數等

一 荒増 絵図面入用之趣□  
一 指出可申事

一 測量道筋人家相離□

一 小休所仮ニ用意申付 等ニ而茶差出申候夏  
野風呂

(注) 宿亭主の出迎えは、町入り口、宿場口、船付

き場と指定されることが多いが、ここでは門  
前でいいとされた。

一 賄之義 上分壱汁三菜下分

一汁一菜 相居置 尤魚類  
自由之場所ニ而者一二菜

一 熨斗三方指出候事  
一 御朱印臺用意仕候事

(注) 忠敬が所持するのは、御証文であつて  
御朱印状ではないが、床の間に置き場が用意さ  
れた。他の史料によるとお証文箱は施錠さ  
れており金庫の役割も兼ねていたらしい。

之義者臨時之取斗いたし  
茶くわし等指出し候事  
但し国内入込之初而之止宿  
ニ而者二三種ニ而酒 指出  
其後之義者有合□  
珍敷品有之場所ニ而ハ  
手軽差出し候積りニ御座候

一 旅宿可成又一軒ニ相配呉候様

ニと 御望ニ付大躰者間廣之口  
相配候得共間挟之處者一三軒

ニも 相配候事

但し 塵子 澪 壁 疊等相□  
取繕申候得共大ニ不見苦  
者其儘相用申候

一 熨斗三方指出候事

一 御朱印臺用意仕候事

の形をした、小型の野外用湯わかし。

一 測量手伝人足 事馴候□  
人物相選拾人斗差出可申

一 諸荷物送り人馬百人斗用意  
申付候事

一 測量之砌 砌道筋村浦 高  
家數 人数等 □□□二、□

案文を以相好之由於當□  
同所相好候ハ、差出積ニ候□

一 宿々ニ而夜分測量砌十坪斗  
之明地入用之旨ニ付 場所相  
撰紋附幕 差出可申候事

一 国内嶋々取渡候節は浦船  
用意、申付候事

一 測量道具左之品々入用之  
趣ニ付用意申付候事

杭木 九本  
内五本者 長三四尺  
内四本者 長堀間余  
壱尺廻り位

懸矢

ほんでん 八本  
内六本者 長六尺位  
内武本者 長堀丈位

一 駕式三挺用意申付候事

(注) 測量用品の用意が具体的なところに注意して  
欲しい。駕籠は乗用だけでなく、救急車、貴  
重品運搬もかねていた。

一 測量之砌 執筆手傳いたし  
呉候様 御話しニ付處役人共  
差出申候事

一 郡境村境之印 木杭建□  
一 海岸通行ニ付而者 細道  
二而も附出可申右取繕も  
不相調用之場所者浦船  
用意申付候

(注) 海岸の細い道もはかられるから、難しいとこ  
ろは船を用意しておけといふ。

一 途中 測量場所へも毛氈  
薄べり 野風呂 煙草盆  
等用意申付候事

一 木錢相拂候ハ、受取せ可申  
候事

一 測量路々分ニ手ニ而相成□  
も可有御座由相聞申候

一 他領江船路被引移候砌は  
関船、漕船を指出相送可申  
候事

以上

(注) 測量場所は天測場所のこと。木錢は宿泊料、  
他に米代をその場所の相場で一人一日五合分  
払つた。忠敬持參の帳面に村方が受領印をお  
すようにしていたという。

他領に移りたいといわれた場合は、出発側の  
領主が船手配せよ、と幕府指示を受けていた  
ので、閑船（大型船）を用意し、曳航するた  
めの漕ぎ舟の手配も指示している。

以下、船手配が続くが、測量方への手当かと  
考え整理してみたが、最後に十六日、お女中  
出船とあり、期日も、多度津測量は九月であ  
つて時期があわない。姫君のお嫁入りでもあ  
ろうか。藩を挙げた大船団である。参考とし  
て残しておく。

三月十二日

一 左之通御船組帳 御切紙添来ル  
元締弥兵衛へ相渡候

一 御召 日吉丸  
御船組  
御船頭  
中西佐次兵衛  
目附  
丸岡清兵衛

一 檜取 石原善兵衛  
大工  
香川勘助  
貝勘  
大鞍  
加子  
五拾武人

一一一	神村大助	近藤壽元
凌波丸	斎藤治助	箕部八為
小遣船	今西清八	河口榮之助
式艘	長野番吾	河村雄之助
拭板	河村武治郎	小倉武治郎
同下部	煙七郎	石井兵平
御道具之者	稻田永碩	真鍋新
御草り取	香川久悦	大久保清八
御臺所藏方	佐藤兵弥	中西啓治
同五人	真鄉庄助	小西愛藏
式人	佐藤兵弥	中西啓治
加子式拾人	真鄉庄助	小西愛藏
加子拾式人	同荷物老拾式箇	同荷物老拾式箇
御船頭	御小納□□	附紙
小寺七兵衛	御臺所長持老棹	
楫取		
河田五右衛門		
近藤壽元	神村大助	上下七人
足輕	上下式人	加子
小人	具足櫃	傳馬加子
下三人	御用挾箱	三拾四人
堀荷	竹馬	弥平
佐名木伝衛門	名尾絆三	四人
下目附	管丹下	半□
鈴木善太夫	上下四人	矢倉
上四人	御用挾箱	
式箇	具足櫃	
堀荷	竹馬	
荷物	合羽籠	
挾箱	挾箱	
足附	竹馬	
荷物	荷物	
式箇	合羽籠	
堀荷	堀荷	
堀荷	堀荷	
堀荷	堀荷	
内山彌藏	類麒麟	
河口榮之助	小倉民治郎	箕部八為
長野番吾	河村雄之助	今西清八
河村雄之助	河口榮之助	斎藤治助
下四人	下四人	下式人
趾附	趾附	荷物
荷物	荷物	荷物
式箇	五箱	式箇
堀荷	五箱	堀荷
下部堀人	荷物四箱	下五人
御船頭		
嘉右衛門		
西山源兵衛		
楫取		
上下式人		
加子		
式十四人		

伊藤文八  
松原嘉平

下部壱人  
挟箱 壱荷

杏籠  
御厩荷物 四箇

御用人中占申聞 元ノ利左工門江達ス

笠井嘉右衛門

船橋運平

小川又治

吉田為之丞

森覺右衛門

下部壱人 荷物四箇

四拾石積  
町船 壱艘

船頭 忠兵衛  
増加子 武人

辰四月分  
四月廿日 曇、夕天

勘定方

文化五年日記

辰四月分

勘定方

神村大助 駕  
管丹下 駕  
近藤壽元 駕  
船數 駕

大小拾艘

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

駕

御用、取扱向等省 隨分□  
□先達而及御文通外格別  
相替品も無御座候 其内 右  
御役人ヲ先觸ニ相添書上帳  
仕立方安文達有之順達及  
差配申候定而追々貴國江も御  
同様之御義と被相察候得共  
先為御心得書上帳案文写  
掛御目申候 右書上帳面案文

之内調子入組過 急々仕立も  
難調ケ条も相見候義ニ付淡忍、  
ニおみて 右訳相含 彼是  
御役人江移合之上於當国□  
させ相済候写別紙之通ニ御座候  
為差義も無御座候得共御問  
合ニ也可相成哉と奉存候ニ付□  
為可得御意如此御座候恐惶□□  
四月廿一日 アノ方  
兩人宛 連名

寺	何ヶ寺	内	何宗何寺	何宗何庵	何社	神主	何宗	寺院	口
一	遠山見渡	一	名產	古城趾	名所	社	名所	何	一
一	何山	一	何	何山	誰古城	一	何	何	一
一	方角	一	何	誰古城	一	何	何	何	一
一	何元何里世餘	一	何	誰古城と	一	何	何	何	一
一	家數	一	何	伝へ候と認	一	何	何	何	一
一	何軒	一	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
一	人冢御座候	一	何	以上	以上	以上	以上	以上	以上
一	何村方海上何町方角何	一	何	以上	以上	以上	以上	以上	以上
一	何嶋周	一	何	以上	以上	以上	以上	以上	以上
一	何町何拾軒	一	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
一	深何拾間	一	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
年	右之通相違無御座候	年	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
月	船掛湊	月	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
日	何村庄屋	日	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上
號	誰印	號	軒	以上	以上	以上	以上	以上	以上

書上

三月

文化五年日記

二重ニ相見ヘ候得共表方來候写之  
通り其儘相認申候

阿波国板野郡

土佐泊浦

阿波国板野郡

土佐泊浦

同廿一日 天

同廿一日 天

辰五月分

勘定方

同四日 雨、夕晴

同三日 天 無意儀

高 七拾九石三斗武升九合  
家数 式百九拾五軒

三石村北境方

浦長 百七拾四町 但 同村南境迄  
居浦海邊通ニ御座候

三石村北境方

御朱印高無御座候  
新祇大明神

三石村北境方

社 三ヶ所 瓶浦大明神  
名所 王子大明神

三石村北境方

旧跡 鳴門  
古城跡 壱ヶ所 城主相知不申候

三石村北境方

古戰場 無御座候  
名産 無御座候

三石村北境方

鍋島周廻 老町参拾間  
君嶋周廻 見渡 壱町三拾武間

三石村北境方

船懸湊深 武町四拾武間  
遠山見渡 淡州沼鳴 己ノ方

三石村北境方

右之通相違無御座候己上  
几 五里程

三石村北境方

文化五年年  
土佐泊浦庄屋  
弥兵衛印



村境を示す図

一 塩木 松さき間川筋之義七分は松崎  
有之趣申伝居候旨ニ承居候 村方ニ而  
其通 相心得居候事哉得 承 □  
見られ鳥渡画図ニいたし出候様被達候様は  
代官中迄先日申置候處 左之通画図面差  
出候事 但し朱ニ而出入ノ分は今日差配  
口上三而 承り候を書入書、候事

一役所出仕

一代官善助左之書附出ル

口上覚

一 測量方御先觸写到来候趣□  
別紙之通 御船手方御浦手  
去る廿六日當組浦手 村々江御  
達 御座候段申出候ニ付則右写  
左之通 御先觸

御證文 書上御案文  
余木村送り状 壱通  
御船手御廻文 壱通  
御船手御廻文 壱通

御船手御廻文 壱通  
御船手御廻文 壱通

右之通差上申候

以上

五月三日

大塚周治  
須藤九平太

御用先觸	測量方
一 人足	八人
一 馬	同
一 長持	老樟持人足
右は我等共国々測量為御用	
上下拾六人 淡州方測量相始メ	
阿瑟士瑟豫州讚州近海邊浦々	
嶋々其外最寄山々城下等	
不殘相測量候ニ付御證文之通	
書面と人馬無遲滯繼立且	
嶋々有之場所又は海岸通行	
難成場所は船用意致シ其外	
止宿等差支無之様取斗可被	
申候 尤右通行筋山川共致	
測量候間村々繪図面持參	
案内可有之候	
一 泊り宿之義雨天其外御用	
調測量器御手入等ニ而逗留	
いたし候ニ付途中方追々可達候尤	
御測器据込候間南北見晴らし	
地所十坪斗り用意可有之候	
泊り宿ニ而夜分測量いたし候間	
可成口上下不殘同宿積り	

若村方建家間挾二而同宿  
難成義も候ハ、近邊江別宿可有  
之候 支度義は御定之木錢米代  
相拂候間 其処有合之品三而一汁  
一菜之外馳走ケ間鋪義可為無用  
候則御證文寫三通相添差遣候  
此先觸早々致順達讚笏方播笏  
室津江繼送同所ニ留置我等到  
着之節可被相返候 以上

青木勝次郎  
下河邊政五郎  
柴山傳左衛門  
坂部貞兵衛  
伊能助解由

印 印 印 印 印

攝津河内大和伊賀  
街道尾張木曾甲州  
往返共伊能勘解由  
度も可持送者也

備前印

右村宿中

人足壱人馬六疋從江戸東海道  
筋大阪淡路四国海邊廻浦并  
同所嶋々播磨摂津河内大和  
伊賀伊勢国々街道尾張木曾  
甲斐両街道往返共測量御用  
付 高橋作左衛門手附伊能勘解由  
同下役坂部貞兵衛柴山伝左衛門  
下河部政五郎 青木勝次郎 罷越二付  
姥人武疋 勘解由 奄疋充 貞兵衛伝左衛門

政五郎勝次郎江取渡之者也  
文化五辰正月  
備前印

伊能勘解由義為測量御用

東海道筋大阪淡路四国海邊

廻浦井 同所嶋々播磨摂津

河内大和伊賀伊勢国々街道并

尾張木曽甲州両街道 往返

共於途中茂測量可致候間

其の先々ニ而差支無之様 尤地方

通行難成所ハ 其所迄船を

出し 案内致無差支様可致者也

文化五辰正月

備前 印

宿々  
村々年寄とも

以廻文申達候然者 測量  
先觸壹通 書上案文 壱通  
御證文写 三通

別紙送り状之通 去ル十九日辰ノ

刻与州余木村迄到来ニ付浦々

順達し刻積を以一昨廿二日子ノ刻

御供所浦迄鵜足津江及順達候

ニ付則右写差越候間写取斗

合之義取斗可申 尚委細之

義は御郡御町方迄も可申達候条

可得貴意候 以上

一 御證文之寫 三通

但し壹通ニは墨附壹ヶ所有

一 御先觸 壱通

一 書上御案文 壱冊

但し、一紙ニ墨附壹ヶ所有之候

右之通測量方御先觸到□

御立會之上御渡申候所相違無

御座候 以上

与州余木村庄屋

源八 印

一 代官中迄測量ニ付与州今治表方迄聞合  
返事写出ル

文化五辰年 四月十九日辰之下刻  
讚州蓑浦庄屋 小黒茂兵衛 殿

(注) 老中發給の御証文写しを添えた忠敬の先触れ

が、伊予の国境の庄屋から讃岐の庄屋に村継

ぎで到着した。刻付けという至急報で、受信

時刻が書かれている。大至急自分用の写しを

つくり、隣村に伝達する。順達されて藩庁の

勘定方に報告が上がる。

貴札忝致拝見候如仰未得御意□□  
候得共各様愈以御堅勝被成

珍重存候然者測量一件ニ付御聞

合候趣委細致承知候則先達而

於土州笠峯右御役方様□

申上候趣且其余□當方心得之

筋荒々別紙ニ相記入御覽

申候尤何連当国江御引移

御座候而も御領數之義ニ御座候ニ付

夫々御仕成萬端御隣領

相□義ニ付而是兼而治定

之義は難得御意候尚宇和鳴

邊御仕成致見聞候ハ、早速

微細ニ可得御意候間左様御承

知可被下其余萬々差懸リ承ル

義御座候ハ、是又為御知可得

御意 右御報道 如此御座候恐惶頓首

当地御入込之節御窺申上候処□□

七月時分と相心得候様被仰出候事

街道筋測量之義ハ無御座候

由土高知川之江迄 街道

筋者四国中墨之為に測量

申成由其余街道ハ御測り不

被成趣ニ相聞申候  
絵図面之義は海邊通り村  
大体委敷相認メ海邊ニ不拘村□

- 地面被可致置尤海邊ろ□□□  
二相成候山森林等者方角を□  
書上二記置候事
- 一 大汐満際二而 見通しニ相成  
所は几式拾間三拾間又は  
三間五間程ツ、隔杭を打  
一番杭ろ二番杭江何之方  
何分二当リ又二番杭ろ 其  
次之杭へ 何之方何分、當ルと  
順々ニ 相記置候事
- 一 御領分境並郡村境建杭之義  
字和嶋邊承合之上可相定は  
心得居申候
- 一 有之候分書出し其余相認不  
申候事
- 一 御會敷之義土州表承合候所  
御巡見様御同様之由御座候得共  
何連当國御隣領之御振合  
ニ准し可申心得ニ御座候
- 一 繩引人足之義は御一手先ニ付  
八人程手当之事
- 一 絵図面取出之義は先□□  
ニ致置於御隣領御伺申上候□□  
書入可申心得ニ御座候
- 一 川之江ろ土砾境筆ヶ峯□□  
之節山里之無差別几式里斗  
之處ニ而御止宿之手當可致様  
仰出候事
- 一 御道筋道橋兼而取繕用意  
可致心得ニ御座候
- 一 仮雪隱之義 御昼所其餘御小休  
等相構候場所ハ 上中下三ヶ所  
斗リ拵候 心得ニ御座候  
右之外相智候義も御座候ハ、  
追而御通達可仕候
- 一 右両通求馬殿へ差出 夫々御聽書相濟  
測量之義ニ付今治問合 返事も差上出候
- 病中目代願 岡田勘治
- 右願出 昨日長尾吾助ろ受取 今日  
求馬殿江出ス
- 一 代官中ろ此度測量ニ付書上入用御領分  
村々 御朱印高 高等此間問合有□□  
去ル寛政元酉年御巡見之時分ニ差出候  
扣 右一件写有之写取利左工門江相渡候
- 一 表紙殿(?) 役手ろ來月 着之節□  
申趣ニ而 看板式拾五枚借度旨申來候  
元メ利左工門ろ申出ル 取集用意之様  
達置候
- 一 左之通 承置申候様、求馬殿ろ御差越有之  
御手紙致啓上候 然者  
公邊天文方 為測量御用ト罷越ニ付

同廿八日 終日雨

五月□日 小倉勝田  
西田三橋様  
尚以御差越五通致返却候  
間 御落手可被下候

尚以御差越五通致返却候  
間 御落手可被下候

此度 測量御用 公義御役人巡国之□  
萬メシ此方御役方ロ表御役方へ問合□  
有之べくニ付 萬メシ無滯意 申談 、 □渡  
度旨今日 求馬殿ろ 表御用番 佐々九郎  
兵衛殿江 御意紙持參候由 被仰聞候ニ付  
周藏義 三橋武太夫方罷越 右御頼も有之  
□事ニ付 尚受無滯意 御申談 程度且つ  
大庄屋 庄屋共ロも其御方 顔役之者へ  
何角問合等も可有之 申談候様 被達置

此度測量 御役人參候ニ付麻御幕 五張  
入用之處 宣舗所式對ならては 無之ニ付  
急き 新規壹対申付 候様元メ利左工門□  
達候

多度津油屋熊藏安右衛門ロ 質銀二差支之  
趣ニ而 銀八貫目ツ、拝借願候ニ付 此間  
求馬殿へも 及御鳴 御觸書ニ付 相渡候様  
真鍋林治江 相達候

御仕成向等之義御他領聞合之上

追々取斗之義御用□

申出到處宜取計様被申達

阿那た様御領分浦々之義も□□

取斗可申所存ニ御座候尤 当御領

内絵図面之義も御郡御町ニ而

致出来候間浦方町間干潟□

之儀右奉行中申談認か、□

右改之節御町懸リ之分者役□

差出為立会候得共御郡懸リ分

数ヶ所之義□最早御迎船役

先之 致出船候ニ付右

奉行中江相聞 差出不申候

阿那た様浦方町數御改之義

御役方ニ而宣御取斗御座候様

致度御座候右 可得御意 如此

御座候已上

篠原為治

五月廿六日 戸祭嘉吉

(注 途切れ、意味不明な部分が多いが感覺的には  
ご理解いただけると思ひ続けます)

### 文化五辰年日記

六月分

勘定方

同十二日 天

大見村 演之堂南東境  
朝津川添道切境  
唐嶋向堤切境  
塩木水門切境  
村境観

同十二日 天  
一 今晚 御銀船出帆二付  
銀 拾式メ目  
但し金式百両代 鴻ノ池返銀 治郎左衛門一名  
二而文通但し利銀差添申候事  
名

同五十貫目  
為替引当 井筒屋□□

ペ

右船江井筒屋治郎□清兵衛乗  
晚方周蔵暇乞旅宿へ参ル 同  
酒五升弁當其外千肴野菜類□

代官利左工門ら測量ニ付此度出来候浦手  
画図差出ス 明日豫約へ持參之由 幷ニ  
表方ニ而は此度豫約へ参候庄屋共江  
御郡方ニ添簡參候由此方ニ而も同様又  
願出候ニ付表御部方西田三右衛門申談し  
阿の方文通に認かへ貰苦ニ 相成其段  
利右衛門江申置候事

一 夜中三輪善助來ル 測量書上案文  
差出ス 表方並合之事ニ付 存寄無之  
旨申置 直ニ戻ス 此方ニ羽方村庄屋  
森小八郎 東白方村同久兵衛□□  
被申候様達置候事

一 先年御巡見之節は庄屋共□□□  
憚候様ニ相見候得共 此度 森小□□  
ニ而豫約へ参候□ 阿の方ニ而承合□□□  
也

注 記事の中の2つの図は、村境を示すものです。  
記事中の略図で、図面といえないものですが、  
当時はこのように村境が決められていたこと  
が分ります。



村境を示す図



## 伊能探訪

### 肥前・筑前の旅

玉造  
功

## 鹿島市と嬉野市の歴史的な町並み

平成二十六年十一月に全国町並み保存連盟の

「第三十七回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会」にNPO法人「小野川と佐原の町並みを考える会」の一員として参加する機会が与えられました。そ

の際、佐賀県嬉野市で伊能忠敬の案内板に、福岡県宗像市で記念碑に出会いました。

三年前の、それも伊能忠敬研究会に入会する以前の伊能探訪で恐縮なのですが、河崎倫代会員の「ちょこっと伊能探訪のすすめ」にしたがって、「ちょこちょこ」と投稿させていただきます。

### 佐原と佐賀県鹿島市

全国町並みゼミの開催地である佐賀県鹿島市と千葉県香取市佐原は歴史的な関係で結ばれています。それは肥前鹿島藩の初代藩主となる鍋島忠茂が徳川秀忠から現在の香取市内に五千石の領地を与えられ、忠茂を初めとする鍋島氏四代の墓所が香取市内の円通寺にあるという縁に始まった。

また、鹿島市では平成二十四年に「伊能忠敬来鹿二百年記念事業」として、小学生による伊能忠敬学習発表会や歩測体験、伊能測量隊にもなじたであろうという「伊能御膳」の再現など様々なイベントが行われた。このようなことから、両市の交流が深まり、「友好都市協定」が結ばれています。さらに、両市ともに、歴史的に貴重な町並みが有り、国的重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝建地区と略す）に指定されている。酒造業が盛んであるなど共通点も多い。



浜中町八本木宿の酒蔵通り



浜庄津町浜金屋町の茅葺きの町屋

た在郷町であり、江戸時代から商人や船乗り、鍛冶屋や大工などが暮らしてきた茅葺町家の個性的な町並みが特色である。京都の美山や南会津の前沢などの茅葺農家の集落は見てきたが、茅葺屋根の町家が続く町並みは珍しいものである。

重伝建地区の指定を受けた鹿島市の肥前浜宿の町並みは、有明海に注ぐ浜川の両岸に位置し、性格の異なる二つの地区から成り立っている。浜中町八本木宿は江戸時代の宿場町から始まり、明治にかけて酒造業で発展した醸造町である。酒蔵通りを中心に酒蔵等の白壁土蔵が多く建ち並ぶ。大会の開会式は酒蔵の中で行なわれた。また、武家屋敷などもあり多彩な町並みとなっている。浜庄津町浜金屋町は、浜川の対岸の少し下流に位置している。こちらは鹿島藩の港として成立し

狭い路地に茅葺町屋が密集するため、通常の放水銃では効果がないとのことで、背の高いノズルから散水するユニークな消防設備を設置している。

重伝建地区の歴史的な町並みは、本来であれば、建築基準法違反、消防法違反の町並みとならざるをえないため、防火対策に工夫を凝らして、法の適用除外や規制の緩和を受けている。ただ、防火対策と景観保全の両立は難しい課題である。

翌日の現地研修は嬉野市塩田津地区である。地元のボランティアガイドさんの説明では、嬉野市塩田津地区は長崎街道の陸運と塩田川の水運が交差する場所として賑わったとのこと。アメリカ大図を見ると、塩田津は内陸にあるが、有明海の干満の差を利用して、満ち潮で船が入り、引き潮で船が出ていったという。

「居蔵家（いぐらや）」という白い漆喰が美しい大型の町家が建ち並ぶ町並みがその繁栄を物語っている。ガイドさんに「伊能探訪三種の神器」である伊能大図と、『伊能忠敬測量日記』から文化十



嬉野市塩田津地区的居蔵家（いぐらや）



「大図第201号 肥前・大村」から塩田 アメリカ議会図書館蔵

年九月二十二日の部分をお見せした。  
一四ツ半時頃に塩田町着。止宿本陣 弥平治、脇善七、外平兵衛

ガイドさん曰く、「弥平治は古賀さんのといひ、平兵衛はすぐそこ、右側の二軒目の江口さん」とのことである。正面から写真を撮りに行こうとしたところで、「分科会会場へバスが出発します。時間が押しています。大至急お戻り下さい。」との無情のアナウンス。上の写真の右側二軒目の居蔵家が測量隊の分宿先とのことである。



嬉野市「志田焼の里博物館」の窯の中

私の参加した分科会は「志田焼の里博物館」で開催された。会場はサブタイトルの「地域遺産の活用」にふさわしい、四十名を超す参加者を収容する巨大な志田焼きの窯の中である。

地元の報告によると、昭和五十九年に廃業した磁器工場をそのままの姿で保存して、市営の「志田焼の里博物館」とし、地元の自治会が振興会を結成して指定管理者となり、児童生徒の体験学習や地域の祭りの場として利用しているとのこと。まさに、地域遺産を地域の人々が守り、地域で活用している好事例である。会場となつた巨大な窯では火鉢を焼成していたという。近代化産業遺産群に指定されている。

### 三 嬉野温泉で見つけた伊能忠敬案内板

**旅館 大村屋(伊能忠敬本陣)跡**  
 江戸時代中期以後の旅館大村屋は、藩管浴場のすぐ前にあり入浴には便利。嬉野川に面して景色もよく、川中の湯煙もよく見える最良の場所であった。

戦作者で文人の太田南畝  
 (一七四九～一八二三)  
 もここで作詞をし、日本で初めて実測による地図を作った伊能忠敬(一七四五～一八一八)一行もここを本陣とした。



大正三年頃の大村屋旅館

**的場渡跡**  
 江戸時代、嬉野宿近くの道路は宿場を南北に貫通する長崎街道と、これに直角に交わる瑞光寺～藩管浴場間の道路だけだった。  
 嬉野川の東西を結ぶ橋は無く、宿場から東へ渡るには的場渡の渡び石を渡る方法しかなかった。橋が架けられた後も、明治二十年代まで残っていた。

(現在の大村屋付近)

案内板 旅館大村屋(伊能忠敬本陣跡)

現在の大村屋



宿に戻り、「伊能忠敬測量日記」のコピーから、文化十年九月二十一日の記事を探すと、「嬉野駅温泉あり。止宿 本陣 小筒屋 喜兵衛、脇大村屋 兵次郎。七ツ時頃に江戸行書状を渡谷順四郎に渡。佐嘉侯より一同へ御贈物あり。此夜星側。」とある。

宿の人聞くと、大村屋さんは今でもありますよとのこと。翌朝、大村屋を訪ねてみた。そこで

話を聞くと、残念なことに、大正時代の嬉野温泉の大火灾で古文書などの記録は焼失してしまったとのこ

とである。

「アメリカ大図第二〇一号 肥前・大村」を見ると嬉野村のわざわざあるのを見ついた。伊能忠敬本陣跡とあり、「伊能忠敬一行もここを本陣とした」とある。

おしゃれな洋館風の「シーボルトの湯」やレトロな嬉野橋の写真を撮っていると、堀に陶板の案内板があるのを見ついた。伊能忠敬本陣跡とあり、「伊能忠敬一行もここを本陣とした」とある。

#### 四 平戸と的山(あづち)大島

なお、このとき嬉野から出した江戸行きの書状のなかに、忠敬の弟子の尾形謙二郎、箱田良介、保木敬藏が連名で出した書状が含まれていた。忠敬の娘の妙薰に宛てたもので、伊能忠敬記念館の国宝書類番号第一八〇がそれである。坂部貞兵衛の死と嫡男の伊能景敬の重病の報に、尊師が落胆しているという内容である。

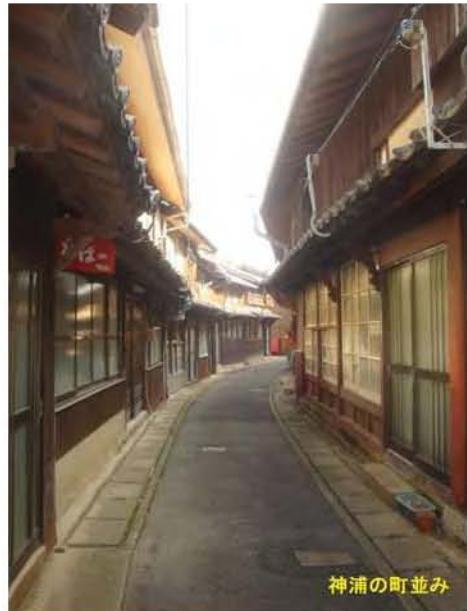


記には「星測」とあるが、このアメリカ大図には天測個所を示す★印が見えない。



「大図第201号 肥前・大村」から嬉野  
アメリカ議会図書館蔵

重伝建地区である神浦（こうのうら）である。平戸港からフエリーで約四十分の船旅である。ここはかつて捕鯨の組織である鯨組の基地として栄えた離島の港町である。狭い道の両側には、江戸から明治時代の家が軒を並べている。



神浦の町並み

伊能忠敬は文化十年三月三日から十日まで神浦に滞在し、六日には「江戸行書状」を平戸に送つた。「東河父」から「妙薰尼へ」宛てた書状が伊能忠敬記念館の国宝書状類番号第七『伊能忠敬書状』の十一頁）である。その追伸に、「三治郎、鉄之助壯健ニ成長、三治郎ハ哥カルタヲ能取候よし、行ニ弟子ニ可相成候。當十一月帰府候ハ、兩孫共ニ対顔可致と相樂ミ候。」対馬海峡の離島から幼い孫との対面を心待ちにしている姿がほほえましい。

的山大島から平戸市内に戻ってきたが、今回の見学コースは町並み保存が中心であるため、松浦史料博物館が入っていない。そこで、昼食の一時

間をカットして松浦史料博物館に入館し、由緒正しい伊能図を拝見することにした。「由緒正しい」というのは、この地図が伊能測量隊の作成によるものであること、平戸藩九代藩主松浦靜山が地図作成を依頼した経緯について自著『甲子夜話』に、「伊能を招て接対し：領内測量の地図一本を予に贈るべしと約して、伊能も諾したり」と記録していること、忠敬の江戸日記にも松浦侯との交流が記されていること、忠敬の歿後、地図を受領した平戸藩が「御絵図副書」に経緯を詳細に記録していることによる。「御絵図副書」によると、忠敬との約束により天文方の高橋景保から入手した地図に対する経費として金六両三歩と銀二匁を、高橋景保に対しては「茶宇御袴地一反」と「ていら三斤」を、地図作成にあたった下役八名に対して金五百疋などを贈っている。

念願の伊能図に対面することができた。展示してあったのは、「伊能図 平戸島図」と「伊能図 九州全図」である。丁寧な仕上げの美麗極まりないものであった。もっとも、見学が終わった後の佐



松浦史料博物館の入口

原の三名の会話は、六両余というのは安すぎないか、「ていら」とはカステラのことだろうかという話題に終始した。

会報第45号9頁の前田幸子氏の記事によると、「ていら」とは、さらした鰐肉のことである。



「伊能図 平戸島図」からの的山大島  
松浦史料博物館蔵 『伊能図大全』より  
「平戸島図」の全体については、会報73号の星埜由尚氏の「グラビア伊能図の旅」で見ることが出来る。

## 五 宗像市で伊能忠敬の記念碑に遭遇

オプショナルツアーや佐世保駅で解散した。千葉県から九州に来る機会もあまりないので、レンタカーで有田の重伝建地区、伊万里、呼子、唐津の町並みをまわって、旅行の最終日に向つたのが

福岡県の宗像大社の高宮祭場である。

高宮祭場は「海の正倉院・沖ノ島」とともに宗像大社で最も神聖な場所である。写真の奥の注連縄で囲まれた樹木（神籬・ひもうぎ）を神の依代として祭事が行なわれる。

社殿が建立される以前の、原初の祈りの姿をう



宗像大社の高宮祭場



かがうこと出来る。私が訪れたときは、静寂そのものであり、時折、玄界灘からの風で、木々がそよぐ音が聞こえるだけであった。ユネスコの世界文化遺産登録の朗報を聞きたいものである。

帰りの飛行機まで若干時間があつたので、神湊に寄つてみた。宗像大社の外港で、中津宮の鎮座する大島への船がでている。港の近くまで来たところで「伊能忠敬」の文字が目に入った。慌てて車を止めて写真を撮つた。

「伊能忠敬宿泊跡」「藩米積出場跡」とあり、反対側には「俳人種田山頭火句碑」の文字も見える。お店の看板には「魚屋」とあるが、見たところ旅館のようである。全く人気が無い。帰宅してから調べてみると休業中のようである。

測量日記の文化九年七月二十六日を見ると、海

辺測量からわざわざ内陸の宗像大社まで測量している。そして宿泊地については、静寂そのものである。石碑の置かれている現在の「魚屋」との関係はわからないままである。地元の方の御教示を願うばかりである。

## 伊能忠敬像制作記

彫刻家 酒井道久



ここで大まかな彫刻の制作過程をお話します。

作品のイメージをデッサンなどで検討しながら習作→シヨン、動き、全体の構成を検討しながら習作を油粘土で制作、→本制作（木材、針金、棕櫚繩などで心棒を作り粘土で成形）→石膏取り→修正→ブロンズ铸造→修正→着色→設置という段取りです。石膏取り、修正、ブロンズ铸造に最短二か月半、逆算すると粘土原型は七月末には終えなければならないことになります。

すぐにイメージを作るため、NHKで放映された井上ひさしの「四千万歩の男」のビデオ、忠敬関連の書籍などで、生い立ち、業績などを調べました。モニュメントの肖像彫刻で大事なのは、その人物を象徴的に表すこと、つまりポーズであつたり、衣装や持ち物であつたり、その人物が歴史に名を残すことになった行動や業績を端的に表し、なるべく一目で伊能忠敬と判るようにすることです。顔は写真や肖像画が残っている場合は、特徴を捉え、似ていることは言うまでもありません。

その上で、「歩く」、「測量」、「五十五歳から」という三つが誰にでも分かり易いキーワードと考え、歩く姿で測量を象徴する器具を持ち、初老の姿の立像という構想に絞らせてきました。

日本人なら誰でも教わっている伊能忠敬のモニュメントですから、じっくりと忠敬の人物像や業績を勉強し、構想を練って習作で検討を重ねてから本制作、そうすると制作期間は二年ぐらいかかるかなと想定しましたが、予定を伺うと伊能測量開始二〇〇〇年記念に合わせ一年にも満たない二〇〇一年一〇月一七日に除幕式をすでに予定しているということで、いささか慌てました。

（1）伊能忠敬肖像画  
以前、日本野鳥の会の創立者である中西悟堂像（2）を制作した際、何枚かの写真を参考にしましたが、最晩年の写真は、仕事をやり遂げた穏やかな表情の老人の姿で仕事に打ち込む熱気や自信はありませんでした。私が選んだのはもう少し若い時代の鳥を肩に乗せて、話しかけるような写真でした。忠敬像でも青木の



（1）伊能忠敬肖像画

以前、日本野鳥の会の創立者である中西悟堂像（2）を制作した際、何枚かの写真を参考にしましたが、最晩年の写真は、仕事をやり遂げた穏やかな表情の老人の姿で仕事に打ち込む熱気や自信はありませんでした。私が選んだのはもう少し若い時代の鳥を肩に乗せて、話しかけるような写真でした。忠敬像でも青木の



（2）中西悟堂像

（2）中西悟堂像  
以前、肖像画をもとにして、一回り若い六五歳ぐらゐの忠敬を想像しながらデッサンに取り掛かりました。強靭な精神力、風格をどんな表情で表現するかがこの作品の最重要的課題になりました。

また像高は、忠敬の背丈を一六〇cm程度と想定

ついたためと思われます。少し高い頬骨も特徴でしょう。この青木による肖像画は、以上の特徴や様を着けているところから、かなり晩年の忠敬を記憶の元に描いたと思われます。

しましたが、公共の野外に設置するモニュメントとして、ある程度の大きさが必要ということで、一・三三倍の約二・二mにしました。大事な歩幅は記録にある六十九cmの、一・三三倍の約九十二cmとしました。

普通、彫刻は等身大に作るとかなり小さく感じられます。それは、プロンズでも木彫でもそれ自体が生命を持たないため、人間が発する生氣や色々動きなどがないからでしょう。彫刻家はそれを補うために多少大きめに作ったり、フォルムの強調や単純化によるデフォルメをします。そのような作業によって、初めて彫刻に生命感が湧いてくるのです。

また、以上の条件や大きさを考慮した上で、伊能図を背景にして地図から歩み出て来るような構想が浮かびました。背景の地図に体の一部を同化させ、今まさに歩測に向かうという構想です。台座は普通、野外に設置する場合は離れたところからも目立つように、近くで見るときは威厳を感じさせるようにかなり高くすることが多いようです。しかし、伊能像の設置予定の場所は周囲もビルに囲まれた神社の境内で、遠くから見ることはないと思われます。力強く歩く姿がよく見えるように、さらに伊能忠敬に親しみをもつてもらうために高い台座ではなく、地上とほとんど同じ高さにすることにしました。イメージ図で示したように参道を模した御影石の上に直接足が乗るようにしました。

一〇〇一年一月六日、伊能洋先生と設置予定地の富岡八幡宮内で最適な場所を選択。一月十三日、第一回伊能忠敬像建立委員会開催（3）三月十五日、第一回伊能忠敬銅像建立実行委員会・同幹事



(5) 伊能新氏、伊能陽子夫人と



(6) 神保家 6代目、7代



(7) 松竹衣装部



(3) 第1回建立委員会



(4) イメージ図

顔のデッサン。

一〇〇一年三月三十一日、伊能洋先生、陽子夫人と1日がかりで伊能忠敬九十九里の忠敬像（天念館で測量器具を見学、彌窯羅鍼（ワンカラシン）の長さなど計測。肖像彫刻として有名な上野の西郷さんも参考にモニュメントとしての大きさ、高さ、衣装の表現などを研究し、四月十二日から二〇日まで、忠敬の顔と歩測する姿をデッサン。

二十一日より五分の一の大きさ（像高約四十四cm）の習作の制作開始。

四月二十四日設置場所の周囲の設計を造園デザイナーの桜庭隆史氏と検討。その後、伊能洋先生の紹介により松竹衣装部で伊能忠敬の衣装をスタッフ纏つてもらい、歩くポーズを撮影（7）、服装の皺などをデッサンする。



( 9 ) 心棒作り

五月六日、習作完成（8）  
十日、石膏屋と鋳物屋と日程検討。  
二十三日、富岡八幡に於ける伊能忠敬研究会で  
習作を提示。  
（9）  
三十一日、粘土一トンを用意。  
六月一日、本制作開始。重さを考慮し、胴体など  
太い部分は木材でおおよそ作り軽量化を図る。  
（17）



( 8 ) 習作



( 11 ) 粘土原型

のデザイン、周囲の植栽など検討。伊能像の背  
景の黒御影石を選定し、伊能小団を拡大コピーし  
た図面を準備し、石材屋に発注。（10）  
七月二十四日 伊能洋先生の紹介により江戸東  
京博物館の竹内館長、小澤教授に忠敬像の衣服や  
土原型を披露。（11）（12）  
八月十日、伊能洋氏、渡辺一郎氏に完成間近の粘  
土原型を歩き方などの時代考証をしていただく。  
十二日、伊能像原型完成、石膏取り。



( 10 ) 背景の黒御

二十三日、石膏原型の修正開始。  
九月四日、伊能忠敬像起工式。  
（13）  
五月、基礎工事開始。石膏原型を池田美術  
造でブロンズ铸造開始。（13）



( 12 ) 完成間近の原型と伊能、渡辺氏



( 13 ) ブロンズ铸造



( 14 ) 設置

十六日、銅像設置。 ( 14 )  
十七日、報道関係にお披露目。  
二十日、除幕。 ( 中川会長ら関係者及び忠敬  
に扮した俳優加藤剛、賀来千賀子さんら )



( 13 ) ブロンズ鋳造



( 16 ) 伊能記念館の習作



( 15 ) 除幕式



富岡八幡宮の伊能忠敬像

先生、陽子夫人、また、発起人で計画段階からすべてを滞りなく進め、私が制作に集中出来る環境を整えていた渡辺一郎氏、最適な場所を提供していただいた富岡八幡宮、浄財を頂いた大勢の皆様他、すべての関係者の方々に深く感謝いたします。



( 17 ) 三等三角点

本制作に関しては、数多くの資料を提供して頂いた上に、伊能関係の神保家はじめ、伊能記念館、ゆかりの地に同行して頂き、彫刻に関しても最後の段階までアドバイスを頂いた監修者の伊能洋

十一月、習作のブロンズ像を伊能忠敬記念館に寄贈。( 16 )

## 忠敬、江戸の仮住い

柏木 隆雄

ることを知った。

以前、市川市で井上ひさし展が催され、当誌の歴代編集長の福田弘行氏と前田幸子氏に同行し見に行った。「四千万歩の男」のコーナーに山と積まれた伊能忠敬関係図書と資料に驚いた。一つの作品を仕上げるプロ作家の執念を感じとった。

浅草の吾妻橋からお台場まで、船で行く東京観光は風情があつて面白い。隅田川に架る橋を下から眺めて深川辺りにさしかかると、清洲橋や永代橋の美しい姿が見えてくる。船が永代橋を通過するとき、私は「四千万歩の男」のあの場面をつい想像してしまう。尾籠な話であるが、忠敬が犬の糞を踏んで、雪駄の白足袋についた汚物を懐紙で拭つて、隅田川に捨てるくだり。忠敬が永代橋を渡るとき、井上ひさしの記述では、通行料を払えとしつこく迫るやくざ風の橋番と、それをやんわりとりなす内妻のお栄を登場させている。

お栄は橋番の男に「この男は絵図をつくるのが仕事、深川黒江町の幸七店から浅草の司天台までの距離を測っている」と説明。「絵図ならいくらでもそこいらで売っている」とまた橋番にからまれると、「もつと方角も距離もくわしく正しい絵図が必要るの。それで深川黒江町幸七店から司天台まで、直線距離を測っている」お栄はつけ加えてこう答える。井上ひさしは、この二人の短いやりとりの中で、忠敬住いを「黒江町幸七店」と重複と思われる記述を行っている。

私が初めて「四千万歩の男」を読んだとき、あまりの長編なので、このあたりの記述はとばし読みしたのか、憶えていなかった。その後伊能三郎右衛門家と柏木家が縁戚という家系のつながりもあり、忠敬研究会に入会し、いろいろ調べてみると、井上ひさしが文中でお栄に二度も言わせた「幸七店」は、先祖の柏木幸七の江戸深川店であ

(51ページ)“忠敬に住いを貸している家主の幸七老人・・・去年の三月から忠敬は借家の屋根の上に「間四方の物干台・・・」

井上ひさしは念を押すようにこう書いている。

大谷亮吉編著「伊能忠敬」では

岩波書店の初版本「伊能忠敬」(48ページ)“実測の必要なるを了知せり。偶忠敬の居所、深川黒江町と浅草歴局との偉度を異にする”こと、一分半・・・

(同53ページ)“露木元右衛門なるもの、忠敬の僕居に臨みてこの月、十六日、出雲守より忠敬をして・・・”

(同59ページ)全国測量の端緒たるべき第一歩を深川黒江町なる僕居より踏み出せり。”

(同60ページ)“忠敬はその僕居を発してより途を奥州街道に取り間断なく歩数を以つて行路の距離を定め・・・”

以上、抜き書したが、「寓居」「僕居」とも言葉の意味は“仮住い”である。(広辞苑)

忠敬日記に見る幸七店との関係  
寛政十二年四月、忠敬に測量許可が下される直前に忠敬は幕府への測量請願、交渉時の頻繁なやりとりを日記「蝦夷千役志」に書き残している。

閏四月十三日

（松平信濃守屋敷への呼び出し状）

尚々麻上下御用意に而、御出被成候方可、然哉に奉存候。

柏木幸七とは  
柏木幸七は、忠敬の佐原時代の商家の番頭で、関場幸七、真木場幸七とも呼ばれていた。幸七は元々は伊能三郎右衛門家の出、忠敬より三代前の昌雄の三男で分家して柏木氏を名乗った。忠敬より年長で、江戸表に店を持ち、米、油、薪炭など手広く商いをしていた。忠敬の先妻、達が亡くなつた後、娘の妙諦（本名はいまだに不明）が忠敬の身の廻りの世話をし、二男一女を生んだ。次男の秀蔵の母親である。幸七は、忠敬の蝦夷地測量の長旅の門出を千住で、俸の時右衛門と共に見送

黒江町家主幸七店

伊能勘解由様

靈巖島御会所より  
柄原屋角兵衛  
田中屋 伊助

井上ひさしは、忠敬日記の中のこの記述を見逃さなかつた。  
「四千万歩の男」（講談社文庫本）

つた。

忠敬が測量の助手として連れていった次男の秀蔵は幸七の孫、その旅立ちも心配であったのだろう。幸七は、見送りの日から三年後、江戸で亡くなつた。

(かしわぎたかお、柏木幸七の子孫)

#### 〈付記〉

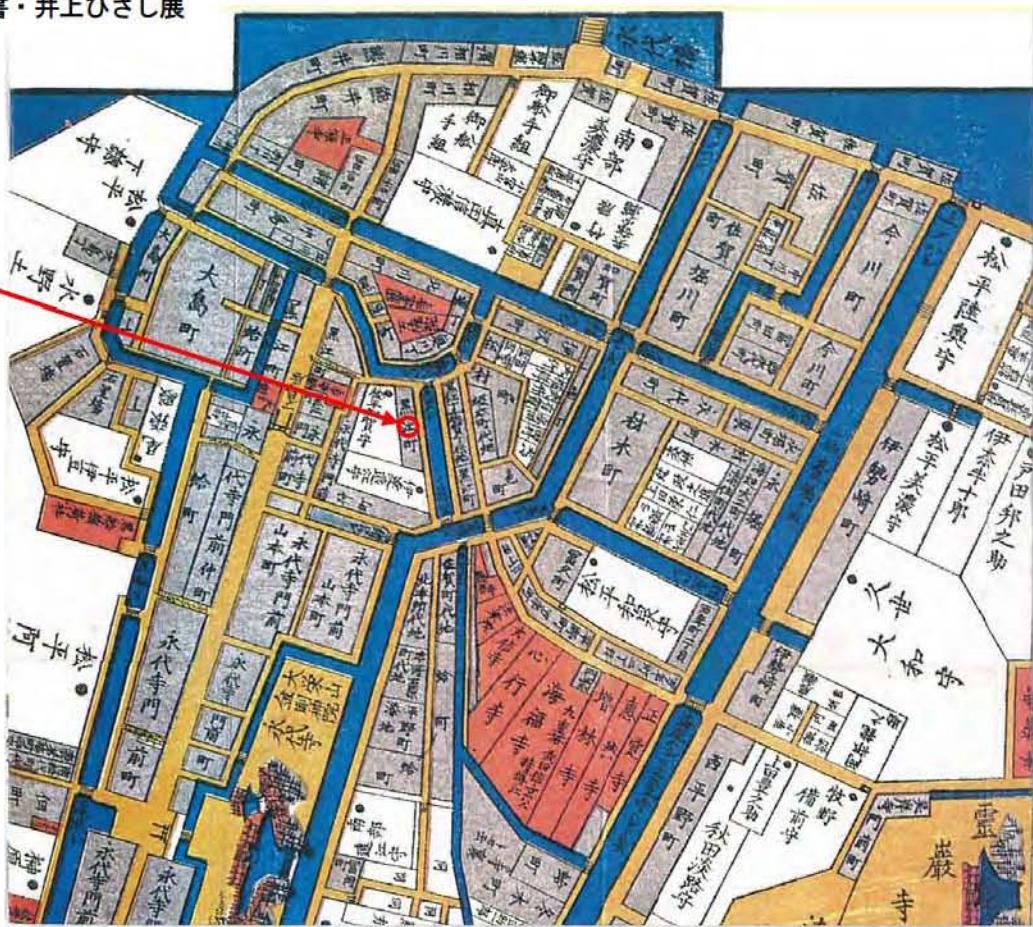
深川黒江町

永代橋近く、隅田川から割り込んだ仙台堀の支流に面し、松平加賀守、伊達遠江守の屋敷に隣接している。永代寺、富岡八幡宮の広大な緑の領域は至近。川筋を利用した船積問屋、米穀商、油商、材木商などの問屋が多く所在する。

江戸切絵図  
資料の切絵図は、嘉永五年刊行の金鱗堂尾張屋版の深川絵図である。金鱗堂版の特色は色摺りが華やかで、神社仏閣は赤、橋と道路は黄、町屋は灰色、海川池は青、森や馬場は緑と色分けし、見易く工夫されている。



忠敬関係図書・井上ひさし展



江戸深川絵図 嘉永5年金鱗堂版

#### 〈掲載写真〉

忠敬関係図書  
江戸深川絵図

#### 「訂正とお詫び」

前八十一号での拙稿の中、「忠敬が模写した世界図」は伊能淳氏が所蔵するもので“伊能家から忠敬記念館に寄贈”は誤りでした。訂正し、伊能淳氏に深くお詫びを申し上げます。

柏木隆雄

## 忠敬資料の絵図

### 「金澤八景之図」を読み解く

神奈川県藤沢市 文 大沼 晃  
写真・構成 狼 芳明

平成二十八年十一月二十二日、本研究会会員の柏木隆雄氏に誘われて千葉県佐倉城址公園内にある国立歴史民俗博物館へ出向き、柏木家寄託資料を閲覧した。以前、数ある資料の中に「金澤八景之図」（以下絵図）があることを柏木氏から伺つたので、どの様な絵図なのか神奈川県人として興味関心があり、予てより閲覧の希望をお願いしていた。

【閲覧時の様子に関しては、会報第八十一号に掲載されている山本氏投稿の「忠敬仲間集う」をご覧ください。】

【柏木家寄託資料に関しては、会報第五十五号および五十六号に掲載されている柏木氏投稿の「柏木家の残された忠敬資料」をご覧ください。】

絵図（図1参照）は、全体に色焼けし大きなシミが付着しており、さらに欠損もあるため資料としての価値が残念ながら低く、また、どうも江戸名所図絵のように市中に広く出回っていたものではないような気がした。そのようなことで、探求心が薄れしばらく放置のままであったが、平成二十九年三月五日付け産経新聞神奈川版の「かながわ美の手帳」を読んでいたところ、神奈川県立金

沢文庫で開催中の特別展「愛された金澤八景」の紹介記事の中に、昔お世話になつたことのある同

資料（図2参照）を頂戴した。

【略】伊能忠敬研究の中で、金澤八景図があるということでお写真をお送りいただきました。とても有名な図で、以前金澤文庫で開催した特別展「金澤八景歴史・景観・美術」の説明文の写し（筆者注・図録のコピー）をお送りいたします。

この図の発行は文化十一年（一八一四）といふことで入手はその後になります。発行元の金龍院は現存する臨済宗建長寺派の禅宗寺院で、金澤八景図を発行した二ヶ所のうちの一つです。

金澤八景が有名になったのは、能見堂というところが明の禅僧、東臯心越（心越禪師）の詠つた漢詩を刷物にして広め、「金澤八景」の八カ所がほぼ固まりました。それまでは瀟湘八景になぞらえて、色々な人が勝手に決めていたのが、心越禪師の漢詩で「能見堂八景」として決まり、それが「金澤八景」の決定版となつていきました。

その後、平潟湾に突き出た岬の麓にあつた昇天山金龍院が岬上に九覽亭という物見台をつくり、自ら今回のような八景図を刊行し、後に下絵を送つて歌川広重に描いて貰つた金澤八景図「武陽金澤八景略図」が人気となり、広重自身も八枚組の金澤八景図を描いて大人気となりました。金龍院は広重に「金澤八景図」という小判八枚一組の浮世絵も依頼してお土産品にしました。

さてお尋ねの図は、金龍院としては最初に外部の方に依頼して描いて貰つた金澤八景図です。図



図1 出典 柏木家寄託資料 国立歴史民俗博物館蔵

中に「平安」という言葉があり、江戸ではなく、もしかしたら京都の絵師「馬こう（土十同）」に依頼した可能性があります。贊文中には馬こうが昇天山に昇つて真景を描いたとあるので、京の絵師かどうかははつきりとしません。ただ、実際の姿にかなり近い可能性はあります。図の真ん中で海に突き出ている処が、昇天山金龍院九覽亭です。

### 略

このように絵図の由来や発行の時期は文化十一年甲戌晚秋であることが分かったので、多少私見を交えながら読み解いてみましょう。

(一) 絵図を初めて歴博で見たとき、伊能測量隊は第二次測量(享和元年「一八〇一」)に際し、事前準備のために絵図を入手し活用したのではないかと推測したが、大きな誤りで実際は十年後に作成されたものであった。

(二) 伊能測量隊は四月二日江戸を立ち、川崎→神奈川→保土ヶ谷→横浜を経て九、十日にかけて金沢八景一体を測量し三浦に向かつた。能見堂まで足を延ばし所々測量したが、金龍院には立ち寄った形跡がない。当時は、まだ有名になつていなかつたかも知れない。

【このあたりの足跡に関しては、会報五十八号に測量日記を基に筆者が投稿した「伊能忠敬と金沢八景」をご覧願う。】

(三) 文化十一年の忠敬の動きを伊能測量関係年譜で調べると、第八次測量から五月下旬江戸に戻りひと休みしたのち、深川黒江町から居宅を八丁堀亀島町の桑原隆朝宅跡へ移し地図御用所を設け

たことがわかった。多分、公私にわたり身辺多忙であったので、絵図の入手のためにわざわざ金龍院まで出かけたとは考えにくい。



図2 出典 金沢文庫特別展「金澤八景歴史・景観・美術」図録より

(四) 図1と図2の墨の濃淡を比較すると図1の方が濃く文字や線も鮮明である。ということは初刷りに近い絵図を忠敬は誰から手に入れ愛蔵し十二年前の第二次測量当時を思い出しながら、時々愛でたのではないだろうか。

筆者の拙い知識ではあるが、浮世絵や刷物の版木は材質の点で精々三百枚前後が限度であり、それ以上になると版木が摩耗し、文字や線が擦れてしまう宿命がある。因みに図2は、人気があるのでも金龍院が後々刷り増しした可能性が高い。また、版元(出版元)が金龍院であると知り驚いた次第である。江戸時代、浮世絵は最先端の情報媒体で、よく版元は商家と組み、さりげなく浮世絵の中に店名の入った看板や店先を描いたものを出版した。現在でいう広告媒体の走りである。勿論、商家は見返りに何がしかの多大な対価を版元に払つたようだ。金龍院のものも刷物だが同様のことが言えるだろう。

金龍院の住職はその面で情報通であり、先見の明がある御仁のようなので、この世に生存していたならば費用対効果のバランスはどうであつたのかなど、無理であることは承知の上で一度聞いてみたいと思った。

そこで四月六日、山地氏へ諸々のお礼や新たな資料収集を兼ねながら同氏による特別展の展示解説を聞きに狼会員と共に金沢文庫へ出かけ、帰路、稱名寺の門前町を散策しながら金沢文庫駅経由で金龍院まで足を進めた。お寺の周辺はすっかり住宅に囲まれており、往時の面影を忍ることはできなかつたが、九覽亭という物見台があつた岬を見上げることはできた。修行中の若いお坊さんから当時の絵図に関する言い伝えは残つていなが、版



図3 金龍禪院（狼芳明撮影）

木が現存すると我々の質問に対しても答えてくれた。  
 (五) 絵図と現代図(図4・県立金沢文庫作成の  
 金沢歴史地図)を比較しながら鑑賞すると瀬ヶ崎  
 あたりの上空から俯瞰した風景であることがわか  
 る。(図4の○印のあたり)  
 山地氏曰く「当然、土産や宣伝用の絵図ですか  
 ら狭い画面内に目に見えるものと見えないものを  
 ギュギュっと詰め込んで描いています。それがこ  
 うした絵図というものなのです。よく見せるため

に画面の構成を  
 変えることがあります」と解説をして  
 いた。

また、絵師は絵図

の中央に金龍院を  
 置き、その上部に稱  
 名寺を配置し瀬ヶ  
 崎から一線上に描  
 いていることから、  
 なかなかの技量の  
 持ち主ではないか  
 と推量した。

伊能測量隊も絵  
 図に描かれたよう  
 な光景の中を三崎  
 方面に向かつたの  
 ではないだろうか。  
 最後に、神奈川県立  
 金沢文庫専門学芸  
 員山地純氏のご協  
 力に対して厚く御  
 礼申し上げ締めく  
 くります。



図4 金沢歴史地図 神奈川県立金沢文庫作成

## 忠敬に着せたといわれるドテラ

戸村 茂昭

### はじめに

「私は陸前高田の検断だった家の分家の子孫です。本家の祖先の忠兵衛は代官からの命令で伊能忠敬測量隊を案内した、と祖先から言い伝えられてきました。その本家の子孫は先の大津波で家もろとも流されてしまいました。また、忠敬が宿泊した小友・衣地の肝入だつた家には忠敬が身に着けたドテラが奇跡的に今でも残っています」。

このような情報が伊能忠敬没後二〇〇年記念に向けて『伊能測量を支えた人々の子孫を探してい』るとの報道発表を伊能忠敬研究会が行つた直後に連絡担当である筆者の携帯電話に寄せられた。本稿はこの情報にまつわつて顕在化した奇跡的な内容をまとめたものである。

一、既存の出版物における「忠兵衛」の記述  
伊能測量を解説した著書に「伊能測量隊まかり通る（渡辺一郎著 NTT出版一九九七）」がある。第二次測量において江戸から房総・常陸・磐城・宮城・三陸にかけての沿海から三厩まで測量が日数にして百三十三日。それを記録した測量日記（原文）は二十二頁に及んでいるが、その著書の記述内容は海中引き縄測量をしたことと吹雪に難没したこと、及び南部領の場合は「仙台領の付添い・忠兵衛の交渉がなければ、南部領では宿泊もおぼつかないところであった」とのエピソードだけである、渡辺一郎氏がしばしば力説するところの忠敬が伊能測量の方法に自信を持つたという

銚子・大若において富士山の方位を測量したことさえ書かれていない。このわずかなエピソードに奇跡的に登場する忠兵衛こそ、冒頭の忠兵衛その人だったのである。

九月二十四日 前夜より風雨、今四ツ頃に至止む。逗留。午後より晴る。夜測量。  
氣仙郡大肝入より高田村検断忠兵衛、浜々付添案内。此所に至り南部領大槌町役人と対談し、是迄仙台領の止宿、首尾令。村々浜々役人案内、大肝入よりその支配の手配り、肝入検断付添の儀、領主より村触、並に難所道絆等迄委細に通達す。然る所南部領には、公儀触は勿論、領主より此度の御用触無之由に付、急に大槌支配の南部役人へ申遣し候よし。それより海辺村々掛役人へ大槌町支配より申令。その支配の向村役人を別に一兩人宛付添、止宿人足の儀執計ける。仙台領案内忠兵衛、並に唐舟浜の役人よりかけ令なくば、南部領にて止宿等の差支は無覺束候。

図1. 陸前高田 検断 忠兵衛に関する測量日記

二、忠敬が身につけたドテラ  
陸前高田は東日本大震災からの復興を象徴するモニュメントとして有名な奇跡の一本松があるところである。図2はその陸前高田近辺の伊能図である。



図2 伊能図#47 陸前高田近辺（伊能図大全より）

伊能測量隊は享和元（一八〇一）年九月十八日曇天の朝六ツ後に大浜村を出立し本吉郡から氣仙郡にかけての海岸を船で縄を引く測量を行なながら高田村に至り、そこからは陸の海辺を濱田村・勝木村・小友村まで測つて仮肝入り与兵衛方（場所は衣地）に宿泊した。その家屋敷は良く、与兵衛は貞実者であったと測量日記に記録される。翌九月十九日は二手に分かれ、本隊は半島を、平山郡蔵の支隊は内陸を測つて未崎村門ノ浜の肝入り治五兵衛宅に宿泊した。

陸前高田の検断だった忠兵衛家の分家の方のお

話では、小友村仮肝入り与兵衛の子孫宅には忠敬に提供し忠敬が身に着けたドテラ（地元では「夜着」と呼ぶ）である。が二百年以上も経過しているのに大切に保存されて残っているという信じられないような話であった。

念のため電話番号を伺つて件の子孫宅に電話でお尋ねしたところその通りという信じられないような話であった。

実地に確かめると共に写真を撮らせていただきうと思いつた、千葉県山武市の自宅から家内と二人で自家用車の運転を交代しながら第二次伊能測量のルートに沿つた常磐自動車道を北上した。

途中、福島第一原子力発電所近くの浪江・南相馬辺りは放射能にビクビクしながら進み、仙台からは内陸の一般道路を走り、合計五五〇キロメートルほど進んでようやく陸前高田に近づいた。

直近の山間から市街地の入口にさしかかったところ、目の前の道路標識には「ここから津波浸水区域」と生々しい津波の痕跡を意味する文字が書かれていた（図3）。

更に進むとそこは全面的に更地となつており工事用重機とダンプだけが忙しく動いていた（図4）。そして、復興のモニュメントである奇跡の一本松は復興工事による嵩上げの中にこじんまりと直立しておりモニュメントとしての風格を感じることはできなかつた（図5）。

市街地を過ぎて内陸の小友・衣地地区に着き、目指すお宅をナビで確かめると小高い森の中などで視界に入らず、屋敷に入るルートも定かでない（図6）。



図4. 市街地



図3. 市街地入口



図6. 目指す与兵衛屋敷



図5. 奇跡の一本松

どうにか入口らしい砂利道を進んでお屋敷に入ることが出来たが、その道は結果として裏道であった。測量日記の記録「家屋敷は良く」とおり立派なお屋敷で間口十四間もあつた。



図7. 与兵衛家の母屋

ご主人（婦人）のお迎えを受けて家中に入り件の夜着（ドテラ）を見せていただいた。一見しただけでその見事さに驚いた（図8・図9）。背中に鳳凰が染められ、裾にも桐の葉と花が染め抜かれていた。勿論、ほころびてもおらず直ぐにでも使えそうである。このような格調高い夜着の提供を含めた印象であろうか、測量日記で忠敬は「与兵衛は貞実者」という表現を使っている。

このドテラについては、平成十三年に陸前高田市立図書館が開催した「伊能忠敬展」において展



図9. 伊能忠敬が身に付けたドテラ（拡大）



図8. 伊能忠敬がみに付けたドテラ

この新聞記事によれば、この展示会のきっかけも冒頭に述べた陸前高田の検断で津波の被害にあつた忠兵衛の子孫の方であったとのことである。さらに記事には忠敬来訪時の地元の歓迎の様子の言い伝えが次のように紹介されていた。「黄川田さん宅のある地名は小友村衣地、そして屋号も衣地。これは伊能忠敬が宿泊の際、黄川田家や周辺住民が鳳凰の絵を染め抜いた衣地のドテラ（夜着）を使用し「踊り持ち」までして忠敬一行を丁重にもてなしたことに由来しているとのこと。測量日記に「家もよし、貞実者」とあるのは、そもそも忠敬が感動したからであろう」と。

(了)



図10. 伊能忠敬展を報じる新聞記事

示されたとの事で、当時の新聞記事も見せていただいだ（図10）。

## 忠敬次女『篠女』の嫁ぎ先

戸村 茂昭

はじめに

忠敬に関する年譜によれば、次女篠女（以下、シノと表記する）は明和六年（西暦一七六九年）に生れ、下総国匝瑳郡大田村の通称佐兵衛家当主の加瀬修助稠卿に嫁したが子がなく、実家の佐原に帰つて天明八年（西暦一七八八年）十一月九日に没した、とされている。計算すれば未だ十九歳、現代で言えば未だ初々しい娘盛りである。

筆者も、まだ初々しかつたに違いない人妻シノの面影は如何ばかりか？とスマートフォンのアプリ「伊能でGo」のフィールドテストのテスト・ポイントとして選んだのである。

一、伊能でGoを同行一人の巡礼の杖として  
「伊能でGo」のアプリをインストールしたスマートフォンでその「伊能でGo」のアプリを起動した瞬間、同行してくれるために画面に現れたのは、まさしくちゅうけいsunであったのが嬉しかった（図1）。



図1. 「伊能でGo」  
起動直後の画面

続いて自動的に遷移してあらわれたのは、現在位置から半径五十キロメートル圏内に設定された伊能測量隊の宿泊先が、オレンジ色の円でグーグルマップ上にポイントされており、目指すシノの嫁ぎ先・下総国匝瑳郡大田村（現千葉県旭市）の加瀬佐兵衛家と思しきポイントが「スタンプを押しにお出でお出で」と誘つてくれていた（図2）。



図2. 「伊能でGo」  
のスタンプ画面

早速、マイカーのエンジンをスタートさせ二十五キロメートルほど先のポイントに向かってアクセルを踏み込む。三十分ほどして目指すポイント地点に着いたが、そこは一見して大田村の名門加瀬家の屋敷跡らしい雰囲気ではなかつた。おかしいぞ！よし、調べ直してみよう、と思いつたのがキッカケである。

二、伊能忠敬研究等での過去の調査結果  
先ずは手がかりを得ようと、「伊能忠敬研究」をしらべてみると、「伊能忠敬研究」をされていない（会報第2号 伊能忠敬の房総沿岸測量 渡辺孝雄著）

「加瀬佐兵衛家の屋敷跡、墓地、菩提寺などを訪問した」（会報第31号 あたらしいことを知る

喜び 佐久間達夫著）とあつた。ところが具体的な場所は書いてない。一方、『偉人伊能忠敬翁とその子孫』（平柳翠著）には「国連大使の加瀬俊一君の総本家」とも書いてあつた。

結局「伊能でGo」もポイントを決め兼ねて適当な場所を仮に設定したのだな。それにしてもこのような雰囲気の場所では困るなど「伊能でGo」開発グループの一員でもある筆者にとっては看過できないこととなつたのである。

どうしたものかなとパソコンの画面を右顧左眄している内に、「未だ誰もチャレンジしていないから可能性のあるのは、国連大使の加瀬俊一さんを調べること」と思い立つた。そこで、「加瀬俊一 伊能忠敬」と検索したところ次のような記事が表示された。

「加瀬英明氏は、元日本興業銀行総裁小野英二郎の孫、外交官加瀬俊一の息子、オノ・ヨーゴの従兄妹という由緒ある血筋の当主です。初代ブリタニカ百科事典 編集長でもあり、80冊を超える教科書や書籍を出版されています。」とのことであつた。

### 三、加瀬英明氏からの情報

早速、メールでアポイントメントをとつてみる。驚いたことに二分後には秘書の方から返信があつた。

「加瀬からでございますが、よろしければ一度、幣事務所にお越し頂きまして、お話しを伺いたいと申しております。つきましては、お空きの日程をご連絡下さい」とのことである。

翌日、午後四時、麹町の事務所をお尋ねしたところ、ネット上の写真では怖そうであつたのだが実物は昭和十一年生まれとは思えないほど若々しくも穏やかな風貌の老紳士が笑顔で迎えてくれた。そして冒頭にプリントを一枚渡された。それは「広報あさひ（H12.7.1）」の記事で題名が「旭ゆかりの人物 衆議院議員として活躍した 加瀬喜逸」というものである（図3）。



図3. 広報あさひの記事



図4. 目指す地点（旭市宿天神青年館）がGoogleMapでヒット

○：墓地らしき場所

早速、その記事を默読したところ、「加瀬喜逸さんは旭町二に生まれ・・・墓碑は宿天神区青年館隣の加瀬家墓地にある」という具体的な情報があつた。  
面会の終了後、寄り道せずに自宅に直行。早く速パソコンを立ち上げてグーグルマップで検索したところ、見事に宿天神区青年館がヒットしたのである（図4）。

そして航空写真に切り替えて見たところ、隣に墓石らしきものが見える。

**四. 現場にて**  
翌朝になって早々にナビにくだんの場所をセツトして出発。三十分程して現地に着いたところ数多くの墓石には「加瀬家の墓」と刻印されている。勿論、大きな喜逸さんの墓碑もあつた（図5）。



図5. 喜逸さんの墓碑

そこで、佐久間達夫さんが会報第31号に掲載したシノさんの供養墓の写真を頼りと/orして一つ一つ確かめ始めた。墓石は五十個以上もあってなかなか見つからなかつたが、筆者の思いが通じたのであろう、三十個目ぐらいのところでようやく「霊空妙融合信女墓」とはつきりと刻印されたシノさんの供養墓（図6）が見つかつた。

シノさんの墓石に限らずどの墓石にも何らかの花や葉は供えられ、シノさんの墓石にはランの葉が供えられていた。

このことはすなわち、墓守が健在だという証である。お隣のお家を訪問し墓守の方をご存知ですか？この空き地の地権者はどなたでしょうか？加瀬俊一さんのお家はありますか？とお尋ねしたところ、「墓守はイリのサヘイさんちの大奥さん。ほら、あそこの青い屋根の家の隣のかたですよ。俊一さんのお家は正院さんといって公民館の隣イリのサヘイさんちの前」とのこと。

加瀬家の子孫は健在だった。お札を申し上げてから、墓守をしておられるというイリのサヘイさんを訪問したところ品の良いお年寄りの即ち大奥さまが挨拶に現れたのである。

お話をしたところ、『古文書は大原幽学記念館に全て預けてあるが、伊能忠敬関係のものは記憶がない。但し、忠敬さんが測量の途中に来て一晩泊まつていったとは聞かされています』とのことであった。(了)



図6. シノさんの墓石



図8. 正院さんち（加瀬俊一生家）



図7. イリのサヘイさんち（加瀬家総本家）

### 伊能忠敬の歩いた福島

勢至堂の板橋峠を越えて会津領に

松宮輝明

忠敬たちは享和2年6月23日(1802年7月22日)上小屋村の本陣内山茂市宅を出発し、牧野内村(天栄村牧野内)で昼食し、六ツ(午後2時)頃、長沼村(須賀川市長沼地区)に着き本陣矢部唯左衛門宅を止宿とした。長沼村金町には松平播磨守の陣屋があり測量機器を馬に乗せ出発の準備をした。六つ(午前4時半)唯左衛門宅を出立し下江花村、上江花村を経て2里2丁(約8.2km)先の勢至堂宿に至り昼食を取つた。勢至堂村の本陣柏木隼人宅は改築中の為旅籠で接待を受けた。伊能日記に「ここは会津領界で安積郡なり・家作よし」と記している。

勢至堂で代々旅籠を生業としていた石井周次・善人氏兄弟は須賀川市勢至堂の宿場は最盛期で人家が四十軒ほどあり、本陣は代々柏木家が務めていました。本陣跡は畑で一族の方々は住んでいません。伊能忠敬が勢至堂村で昼食を取つたことは初めて知りました。この宿場の新しい歴史になります」と話し勢至堂の一里塚へ案内してくれた。

勢至堂峠は伊能日記、伊能図では「板橋峠」と記載している。明治22年の安積郡全図にも板橋峠とある。板橋峠は官名だが、何時から「勢至堂峠」呼ばれる様になつたか研究が必要だ。戊辰戦争の記録に勢至堂村と諏訪峠の間に「鶏峠」があり、官軍が「鶏峠」を越えて会津を攻めたとの記録がある。地名考は歴史の発掘に繋がる。



本陣内山茂市家。

# 「伊能でGO」 フィールドテスト体験記

鈴木 由生子  
戸村 茂昭

## はじめに

スマートフォン用アプリ \*1 「伊能でGO」のフィールドテストを体験しました。テストのポイントは、第二次伊能測量における房総半島沿岸部測量(享和元年「西暦一八〇一年」六月～七月)の宿泊地を辿る地域をフィールドとして、スマートフォン用アプリ「伊能でGO」が操作性の面や動作の仕方の面でユーザーの立場から見て問題ないか、また、伊能測量を題材とした商品として知的ワクワク感を醸成できるツールたり得るかなどを評価することになりました。

本稿はその体験レポートです。

\*1 アプリとは……アプリケーション(ソフト)のことです。

アプリケーションとは、

スマートフォン(以下「スマホ」と呼ぶ)などのパソコンを使って特定の目的を実現するため活躍してくれるソフトウエアのことです。



図2.「伊能でGO」起動直後の画面の状態

ホーム画面上に「伊能でGO」のアイコンが表示されます(図1)のでそのアイコンを指でさわります(この操作を「タップする」と呼びます)。そうしますと、画面にGoogleマップが表示され、そのままの上に現在地点から半径50km以内に伊能忠敬測量隊の宿泊地があればポイント(●)が重なって表示されます(図2)。

その宿泊地ポイントの中心から半径500mの円内

印のスタンプが記録されます。なお、危険回避の為、走行中の車や電車の中では「足跡を記す」のボタンは機能しません。なお、足跡記録はInodeHP上の記録者本人のマイページに記録され、状況をいつでも確認できます。

つまり、隠居した50歳から天文曆学を学び、55歳から17年の歳月をかけて日本全国の実地測量を愚直なまでの生真面目でやり遂げ、日本で初めての精密な地図を完成させたプロジェクトリーダー兼プレーリングマネージャーたる伊能忠敬が実際に「見た」「歩いた」「食事をした」「天測をした」「日記を付けた」等々言うなれば「伊能忠敬のパワー」が漂うスポットに身を置けたというロマンに浸れるナビゲータの役割を「伊能でGO」が果たしてくれるということなのです。

また、面白いことに、例えば図3に示すような状態になった時、未だピンが立っていないポイント(●)が存在すると、どうしてもそのポイントを征服したくなるという衝動が人の本性にはあるよう在我の体験からも感じられ、その事を持つてこのアプリはパワースポット巡りのナビゲーター



図1.スマートフォンのホーム画面  
「伊能でGO」のアイコン



図3.「伊能でGO」起動直後の画面の状態

という効能を持つているようなのです。

## 2. 「伊能でGO」の体験記（鈴木由生子）

2017年4月11日(火)、開発中のスマートフォン用アプリ「伊能でGO」のフィールドテストをイノベティア編集幹事である戸村茂昭氏(以下)指導のもと実施して参りました。

テストのフィールドは戸村茂昭氏の地元でもある第二次測量の房総半島が設定され、当日は行徳からスタートして富津まで私のスマートフォン(機種はiPhone)や、残りの鉤子までは戸村氏が後日に実施するとのになりました。テストの内容はアプリ操作時のスマートフォンの動作確認と、第二次測量における房総半島宿泊地ポイントの確認を合わせて行いました。

当日の調査時間は10時～16時30分。大雨の中でしたが、極力測線に沿つての自動車での走行に同行させていただき、ポイント地点の近辺では車から降りてアプリの動作確認をしました。

江戸時代に行われた伊能忠敬の全国測量の足跡がスマートフォン用アプリ「伊能でGO」の制御下においてGoogleマップに反映され、且つGPS機能を使って辿ることができます。

モニターとしての感想は、ほぼ二百年ほど前に伊能忠敬が宿泊し、天測をし、寝食し、そして翌朝再び測量に出立した場所と同じ地に現代の私たちが自分の脚で立てるという、ロマン溢れる体験ができることは、とても素晴らしいことであると感じました。

そして学びながら行動力も高まってくるようでした。その地域の地形や歴史を調べながら伊能忠敬の測量の道を辿る行動は生涯学習としての充実感も感じられると思います。

また足跡を辿るに連れて新たな足跡がGoogleマップ上に出現することから、その足跡も辿ってみようという行動力が高まって、足跡を記録する達成感も味わえるので、幅広い世代の方が楽しめると思いました。

記録した足跡は伊能忠敬e史料館ホームページ上のマイページに保存されて一覧表としてみるとでき、伊能測量隊と自身の足跡を合わせて

一緒に確認することもできる為、日本全国の足跡を巡る楽しみにもなるのではないでしょうか。

江戸時代に偉業を成し遂げた伊能忠敬と測量隊の世界を身近に感じ、地図に親しみ、尚且つ壮大な業績を実感できるという期待感高まるコンテンツを含めているようです。

「伊能でGo」が完成し発表される日がとても待ち遠しいです。

(了)



図4. 当日、「伊能でGo」で辿った房総の宿泊ポイント

## 英國伊能小図及び 関連英國海図等の

### 見学旅行のお知らせ

#### 1. 参加のお誘い

(公社)東京地学協会の平成29年度  
の海外見学旅行は「英國ジオツアーワーク」  
として企画され、見どころは2つです。

一つは、英國伊能小図と伊能図を  
利用して作製された英國海図等の閲  
覧で、当協会の「伊能忠敬没後200  
年記念事業」の一つとして行われま  
す。英國小図は江戸時代末期に英國  
に渡ったもので、英國は世界で初め

て伊能図を評価し、海図を通じて日  
本の正しい形を世界中に伝えました。  
これらの伊能図、海図等はそれぞ  
れ英國ナショナルアーカイブ、英國  
水路部に所蔵されていますが、その  
オリジナルを直接、閲覧することは  
容易ではありませんが、本旅行では  
特別に閲覧することができ伊能忠敬  
の業績を偲ぶ大変良い機会になります。  
(案内者 元海保海洋情報部長  
八島邦夫)

このほか、グリニッジ王立天文台、  
自然史博物館等も見学します。

募集の詳細等：

株式会社ism のWeb  
[shogai-kando.com/pdf/20170904.pdf](http://shogai-kando.com/pdf/20170904.pdf)

企画主催：東京地学協会

(公社) 東京地学協会 H.P  
[www.geog.or.jp](http://www.geog.or.jp)

旅行主催：  
株式会社 ism (イズム)  
Tel : 03-5214 0066  
e-mail: [info@shogikando.com](mailto:info@shogikando.com)

または、八島邦夫

[kunio.yashima514@y9.dion.ne.jp](mailto:kunio.yashima514@y9.dion.ne.jp)

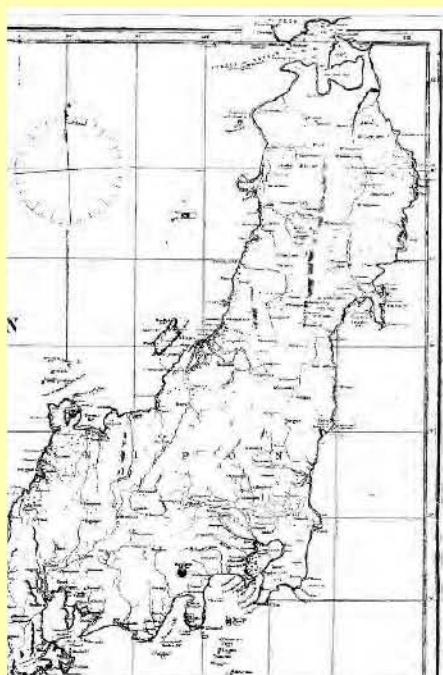
に問い合わせください。

日 程：  
平成29年9月4(月)～11(月)  
の6泊8日

参加対象者：  
地図、地形・地質に関心を有する  
一般の方々



英國ナショナルアーカイブの伊能小図



伊能図以前の英國海図(1855年)



伊能図を用いた英國海図(1863年)

## 会員便り

「伊能忠敬測量隊」

江ノ島・藤沢宿を罷り通る」

## 講演会開催報告

狼 芳明



平成二十八年一月二八日神奈川県  
藤沢市藤沢公民館において、「伊能忠  
敬測量隊 江ノ島・藤沢宿を罷り通  
る」と銘打った講演会が開催されま  
した。(主催者・旧東海道藤沢宿まち  
そだて隊他、後援・藤沢市および藤  
沢市教育委員会他、協力・伊能忠敬  
研究会および伊能忠敬e資料館)

当日は、伊能忠敬に興味を持たれ  
ている方を中心に160名ほどが参  
加。事務局側は、予想を超える来場  
です」と話があった。

者への配布資料の刷り増しや、補助椅  
子の手配やら大忙しでした。

第一部は、伊能忠敬e資料館の横溝  
高一による忠敬の人物像や伊能図の

講演内容は3部構成になつており、

高一による忠敬の人物像や伊能図の  
全体像。特に、如何に正確であった  
か。また、藤沢宿での測量活動の詳  
細について測量地点を特定しながら

具体的に説明を行つた。

それを受けた第二部は、伊能忠敬  
研究会会員の大沼晃による藤沢宿の  
三つの名所のひとつである四ツ谷追  
分を取り上げ、第八次測量の折、東  
海道から外れ、大山を目指し測量を  
開始した地点であること。また、今  
日に至るまで地元の人々よつて大山  
みちの道標や鳥居、不動尊像が大切  
に保存されていることを新旧の光景  
をプロジェクターで拡大映写しながら、  
藤沢宿と大山との結びつきの強  
さなどを説明。講演会にご招待した、  
大山阿夫利神社の目黒久仁彥禰宜に  
飛び入りでご挨拶いただき、神宜か  
ら大山詣では、「藤沢」と「江の島」・  
「大山」の三つの組み合わせが必要  
で切つても切れない間柄なのですと  
いう趣旨の御言葉を頂戴した。また、  
四ツ谷町内会長である磯崎三郎さん  
から帰り際に「大山阿夫利神社とは  
親子の間。現在でも四ツ谷は大山講  
義を継続しており、結びつきが強いの  
です」と話があつた。

会場でも、講師の話に熱心に耳を  
傾けている姿が多数見られた。講演  
会終了後、うら若い女性が横溝さん  
へ、「伊能忠敬測量隊」の廣瀬様、西貝様、皆川様に  
厚く御礼申し上げます。

会場でも、講師の話に熱心に耳を  
傾けている姿が多数見られた。講演  
会終了後、うら若い女性が横溝さん  
へ、「伊能忠敬測量隊」の廣瀬様、西貝様、皆川様に  
厚く御礼申し上げます。

## 子孫探しの経過と結果報告

熊本県玉名郡 平田 稔



の下に駆け寄り、伊能測量隊の観測  
データーなどを欲しいと申し入れが  
あつた。よくよく尋ねたら地図好き  
のお父さんの代理で参加されたとの  
事。

また、当日、横溝さんのご好意に  
より、所蔵の伊能図(大図・中図)  
など20点あまりを会場内に展示。  
こちらも盛況で、色々な方から専門  
的な質問があり、対応にひと苦労す  
るなどうれしい場面も見られた。

来年は伊能忠敬没後200年の節  
目の年を記念して伊能忠敬研究会が  
全国的に「伊能忠敬の測量協力者の  
子孫」を探す運動を昨年2月から実  
施中であることを紹介。これに呼応  
して講師が熊本県内の子孫を探して  
きた経過と、判明した名を報告した。

まず同研究会が「伊能忠敬測量日  
記」の全解説文をCD化し、これを  
もとに日時・場所・人名別検索サイ  
ト「イノベディア」がウェブ上に公  
開したことを紹介。これを使って講  
師自ら、肥後藩と天草(天領)の主要  
人物名を拾い出し、これに自ら調べ、  
知人に教えてもらつた人名を足して

最後に、今回の企画行事を立案さ  
れました。「旧東海道藤沢宿まちそだ  
て隊」の廣瀬様、西貝様、皆川様に  
厚く御礼申し上げます。

94人になったことを説明した。

続いてこの94人から、出迎えや宴

席に出ただけの庄屋・惣庄屋・藩役人・宿主・医師などを除き、「測量作業に実際に立ち会たり、事前に他藩に調査に出向いた姓名のある人物」に絞った上で、検索に出ない県内の該当者を古文書などから加えたら約20人になった、と報告した。

さらに20人のうち、伊能測量に関する古文書を自家に所蔵、あるいは団体が所蔵する古文書の元の所蔵者として県内の五家を確認。この五家の古文書を所蔵先（子孫宅、蔵書先、伊能忠敬記念館など）に訪ね、古文書の写真を撮らせてもらい、興味深い文書を選択して「熊本県資料集」づくりを進めていること、五家の子孫には来年四月に予定されている記念式典への参加の可否を打診中であることなどを報告した。

電話：0968-86-4213

e-mail : aminoru@abelia.ocn.ne.jp  
玉名歴史研究会会員、菊水史談会会員

## 展示会開催報告

北海道福島町 中塚徹朗

昨日より、函館市隣まち北斗市のギヤラリーで

「道南遙かなる歴史街道」  
～先人たちの足跡～

## 地図中心に 特集「ジオパーク&灯台総論」

千葉県銚子市 宮内 敏

銚子ジオパークのビジターセンターで表題の冊子を見つけた。

ご存じのように「地図中心」は伊能忠敬研究会と関係が深い日本地図センターの月刊誌である。



というタイトルで小規模な展示が開催されています。

中塚の伊能関連史料も何点か展示しております。

展示期間  
5月6日～10月頭まで  
土・日・月のみ展示  
入場無料

（ジオパークとは大地の公園の意）  
因みに目代さんは銚子ジオパークの学識顧問で、何度も銚子に来られ巡査やガイド指導などされている。目代さんなら銚子ジオパークを紹介してくれているに違いない。期待を込めてページをめくつた。

屏風ヶ浦の大きな写真2枚が目に入った。目代さんは「ジオパークの目指すもの」、「ジオパークと海岸」、「海岸環境の変化」、「近代化遺産としての灯台」を解説している。

地元、犬吠埼ブランソン会代表の仲田博史氏は灯台と周辺について細大漏らさず簡潔に紹介している。

## 九州版伊能大図パネル展

佐賀県鹿島市 馬場良平

来年は明治維新150年の年でもあり各地で記念の催しが予定されています。

当地、鹿島市では「完全復元伊能団全国巡回フロア展」で使用された大図「九州版」を使ったパネル展が開催されます。

第1回目 平成29年6月17日(土)～18日(日)  
第2回目 平成29年9月30日(土)～10月1日(日)

(冊子の銚子関連部分についてのみ記述)

この冊子をご覧になられた会員も多いかと思います。銚子ジオパークはコンパクト（銚子市のみ完結）で見どころ満載です。公認ジオガイドがご案内しています。専門的なお話し専門員が対応します（要相談）。

日本遺産の町銚子は江戸時代からの観光名所、犬吠埼・屏風ヶ浦に代表される地質遺産は国の名勝・天然記念物です。海の幸、化石海水の温泉もあります。大地の恵みを銚子で満喫されることは如何でしょうか。

銚子ジオパーク公式ホームページ  
<http://www.choshi-geopark.jp/>

第3回目  
平成29年11月11日(土)～12日(日)  
七浦海滨スポーツ公園体育館

と3地区で開催されます。

鹿島市は鹿島藩初代藩主のゆかりの地・佐原、現在の香取市と友好都市協定を締結しており、九州版の当地での披露となりました。



## 福岡県田川市 郷土研究会の活動が新聞に

情報提供は佐賀の馬場良平さん。

西日本新聞に「田川郷土研究会」の活動が大きく取り上げられています。河島悦子氏が参加されています。

て、土木系の高等学校に入り、その道の勉強を始めたのが、昭和三十年でした。その頃に伊能忠敬が、五十年過ぎから全国を歩いて測量をして、全國地図を初めて作った人であり、それは自分の生命が尽きた三年後であつた事を知りました。この響きと感動はものすごいものです。

私は全ての作業を行う時、疑問なところは無いか、疑う眼を持つておりました。

そして北海道は働く時間が少なく、五月より九月までであろうし、道無き道を測らなければならぬので、距離計測が難しいのです。

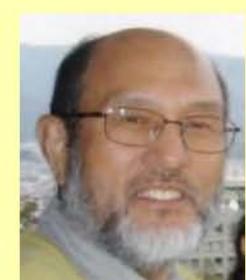
その時、新聞が「北海道上半分は間宮林蔵氏が測量」と知り、疑問が解けたのでした。

私も測量士となり測量方法の各種を知り、当時の測量方法と比較して研究したいと思います。入会をさせて頂き感謝いたしております。



## 新入会員自己紹介

兵庫県篠山市 津田博利



はじめまして。津田博利と申します。このたび伊能忠敬研究会に入会させていただきます。



高井正巳

伊能忠敬先生の学問に対する情熱、その生き様に感銘を受けました。

私は、兵庫県篠山市(旧丹波國)に生まれ、育ち、今も生活しています。伊能忠敬測量隊が、第七次と第八次の二回にわたり篠山を測量しています。特に第八次では、内陸部である篠山を十日間測量しています。

そして、私は、この伊能忠敬のすばらしさに感銘して、地元で「伊能忠敬篠山領探索の会」に所属しています。実際に測量した道を自分の足で辿り、伊能隊の測量の正確さを体現しています。

地域の人達(小学生初め大人まで)に、伊能忠敬の偉大さを知つてもらいたいと、会員一同がんばっています。まだまだ伊能忠敬のことを知りたいと思つていますので、皆様方のご教授いただきますようお願いいたします。

## 訃報

六代目伊能家長女

井上靖子さん  
ご冥福をお祈り申し上げます。

## 退会者

吉田義昭さん

東京都 浅井京子さん

## 紙上総会の結果報告

平成 28 年度

### 伊能忠敬研究会事業報告

本年（平成 29 年度）の総会は、1

年後にせまつた行事に向け会員・役員双方の負担軽減を勘案して、変則ながら集会をとりやめ、全会員に郵送で 6 議案の承認をお願いしました。

議案については、5 月 28 日までに以下のとおり回答があり、すべて承認されました。  
なお、議案の内容に変更はありませんが、承認に際し会員から「指摘いただいた誤記、説明不足、記載方法の不統一を訂正・追加しております。」と指摘ありがとうございました。

会員数：198

回答総数：134  
(その他、退会のため議案について無回答 2 通)

（個別議案については、平成 28 年度収支報告と平成 29 年度予算案に誤記があつたため、不承認が各 1 件ありましたが、その他はすべて承認でした。なお、誤記部分は訂正しました。）

伊豆測量  
講演  
座談会  
コーディネータ  
東京地学協会  
講演会「伊能忠敬と現

1. 会員動向（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

・入会者：15名

金七修、古村佐和子、大星正嗣、平田稔、松宮由生子、松本和典、曾根田馨、松尾政信、岩本敏、清水祥、荒井忠秋、岩橋伊津子、嶋田秀樹、石橋明、稻葉末明

・会報発行  
79 号（64P 6/30 発行）、  
80 号（72P 9/30 発行）、  
81 号（56P 2/28 発行）  
79 号から製本を無線綴に変更

・後援・協賛事業

平成 28 年 8 月 6 日、7 日、専修大学  
専修大学文学部創立 50 周年行事  
「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア  
展」

・記者発表

平成 28 年 4 月 18 日 福岡市立中央  
市民センター

「伊能忠敬旅程・人物全覧データベース紹介と講演の集い」

講演「伊能忠敬の九州測量を支えた人々」渡辺一郎

伊能測量隊全宿泊地掲載 Google  
地図展協議会 地図展 2016 「むちりん 福島の魅力」  
講演「確かに日本のかたち—伊能図の特色と意義」鈴木純子（11月 5 日）  
平成 28 年 11 月 26 日、千代田区（弘済会館）

パネリスト：熱海市長 齊藤 栄、伊能 洋、榎本隆充、木内志郎

代の地図作り」  
講演「伊能忠敬の全国測量と測量日記」星埜由尚

21 日（設立 20 周年記念総会準備）  
第 2 回 平成 29 年 3 月 26 日（伊能忠敬没後 200 年記念事業、平成 29 年度総会等）

平成 28 年 10 月 29 日～平成 29 年 3 月 11 日 江東区文化センター  
講座：没後 200 年 伊能忠敬の世界  
～新たな発見と魅力～  
講師（渡辺一郎、鈴木純子、戸村茂昭）

平成 29 年 2 月 7 日、千葉県佐倉市  
(佐倉市中央公民館)

佐倉市民カレッジ  
講演「伊能忠敬の人間像－人生を一度生きる」鈴木純子  
（佐倉市中央公民館）  
講演「伊能忠敬の九州測量を支えた人々」渡辺一郎  
（佐倉市中央公民館）  
講演「伊能忠敬の九州測量を支えた人々」渡辺一郎  
（佐倉市中央公民館）  
※講演は研究会として対応したものに限り掲載。会員個人の活動は掲載していません。

## 平成28年度 伊能忠敬研究会収支報告

## 収入

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会費	970,000	900,000	-70,000	
会誌売上	30,000	65,400	35,400	
事務所賃料返納		16,500	16,500	3,300×5月(前納分返金)
利息		1	1	
前年度未納支払		10,000	10,000	
(前年度繰越金)				1,973,609
合計	1,000,000	991,901	-8,099	

## 支出

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会報作成費	480,000	353,900	-126,100	印刷費、編集費
会報発送費	80,000	49,845	-30,155	ヤマト便 2回分、事務局からの送付代
事務所賃料	272,100	268,800	-3,300	22,400×12月
記念事業費	500,000		-500,000	繰越金から支出
通信費	60,000	39,822	-20,178	電話代、銀行振込手数料
事務費	80,000	163,872	83,872	記者発表会場(福岡市立中央市民センター) 費33,220、封筒印刷42,822、記念総会 64,371、交通費20,000、消耗品等
予備費	27,900	15,000	-12,900	初穂料10,000、会費返納5,000
(前年度繰越金)				1,973,609
合計	1,500,000	891,239	-608,761	

会計期間：平成28年4月1日～平成29年3月31日

貯金残高 ゆうちょ銀行 2,153,727円  
みずほ銀行 280,544円

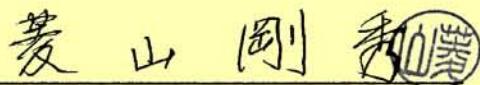
合 計 2,434,271円

貯金残高には、平成29年度会費395,000円を含む

上記のとおり報告します。

平成29年5月28日

事務局長

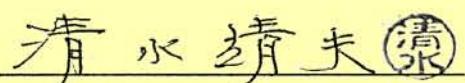


## 平成28年度 伊能忠敬研究会監査報告

平成28年度収支報告は、出入金記録簿と証拠書類を照合し確認した結果、適正と認めます。

平成29年5月28日

監 事



84 83 82 号 号 号 (60p 60p 2月発行)	<b>・会報發行</b> <b>第3回 確認</b> (伊能忠敬没後200年記念事業準備)	<b>第2回 平成30年2月</b> <b>第1回 平成29年9月 (平成29年度総会資料確認書面確認)</b>	<b>・理事会</b> 会員に総会資料を郵送し、議事内容を確認いただく紙上による総会とする。
-------------------------------------------	-----------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------

このため、総会と同時に実施している巡検、講演会は中止する。

2. 事業等  
 入会者 2名 神崎 亮  
 大八木照行

1. 会員動向 (平成29年4月1日～平成29年4月30日)

平成29年度 伊能忠敬研究会事業計画

・後援・協賛事業

地図展協議会 地図展への協力  
東京地学協会 伊能忠敬没後200年  
事業への協力  
日本地図学会 機関誌「地図」  
特集号への協力

3. 伊能忠敬没後200周年記念行事

・記念出版  
「伊能忠敬測量の足跡」(仮題)  
(平成30年3月) A4判 250頁予定

・測量協力者顕彰大会・懇親会  
平成30年4月21日(土)  
会場: 学士会館(東京都千代田区神田錦町)

・都内の伊能ゆかりの地視察  
平成30年4月22日(日)

平成29年度 伊能忠敬研究会予算

収入

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会費(当年度)	970,000	1,000,000	30,000	
会費(前年度未納分)		105,000	105,000	
会誌売上	30,000	30,000	0	
前年度繰越金	1,973,609	2,039,271	65,662	
(次年度以降会費)				20,000
合計	2,973,609	3,174,271	200,662	

支出

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会報作成費	480,000	380,000	-100,000	印刷費、編集費(60p×400部×3回)
会報発送費	80,000	100,000	20,000	4回分(前年度81号分1回追加)
事務所賃料	272,100	268,800	-3,300	22,400×12月
記念事業費 (繰越金から支出)	500,000	2,200,000	1,700,000	記念誌作成140,000(前年度未使用分を含む)、記念事業800,000
通信費	60,000	50,000	-10,000	電話代、銀行振込手数料
事務費	80,000	160,000	80,000	資料印刷、交通費、切手購入代、消耗品等
予備費	2,001,509	15,471	-1,986,038	前年度予算予備費には、当初27,900+繰越金1,973,609を加えている。
合計	3,473,609	3,174,271	-299,338	

※繰越金は、伊能忠敬没後200年記念事業のため、当年度事業費に組み込んでいます。

伊能忠敬研究会 役員改選

伊能忠敬没後200周年記念行事実施のため、以下の役員体制を継続することとする。

(新役員候補)

幹事会監理特別顧問	渡辺一郎	伊能洋
事務局長	鈴木純子	伊能裕雄
会報担当	河崎倫代	伊能義博
会報担当	新沢義博	(記念誌)
会報担当	高安克己	(会報)
会報担当	菱山剛秀	(事務局長)
会報担当	星宇井成一	山本公之
会報担当	清水靖夫	宮内敏
会報担当	戸村茂昭	星宇井成一

## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ① 原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。  
\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。

### ② 原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。  
・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なもの用意してください。  
\*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真的場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真是無理な場合があります。

わからぬ場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。  
・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

### ③ 原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたもの郵送してください。  
その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaiho@inoh-ken.org](mailto:kaiho@inoh-ken.org)  
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階  
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④ 注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。  
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つておいてください。  
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。  
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。  
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

次号（第83号）は2017年10月発行  
原稿〆切は8月31日の予定です！

## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ① 会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ② 例会・見学会の開催
- ③ 忠敬関連イベントの主催または共催
- ④ その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地  
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

電話 FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org  
郵便振替口座 〇〇一HO大-〇七一八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「InoPededia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

および史料 <http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料 <http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

http://www.tt.nim.or.jp/~koko

編集後記 ◇五月の犬吠埼が好きだ。空の青、海の青、そして白亜の灯台。灯台のバルコニーから放射状に綱が張られ鯉のぼりが空を舞う。磯遊びもいい。海岸植物もいい。人出もない。イベントもいい。子供の日はなぜか天気がいい。◇最近デビューしたのがジオガイドだ。心地よい風を頬に受けて出番をテントで待つ。しばらくして自分にも依頼が来た。お客様はつくば市から来られたご夫婦と娘さん。研究機関にお勤めかな、お嬢さんは高校生、それとも、そんなことを意識しながらのご案内。気を使って頂いたのか要所で質問も。久しぶりの楽しいガイドとなつた。◇今月は編集担当なのだが四月末の締切を過ぎても原稿が集まらない。何とかなるさ」とたかを括りゴールデンウィークを楽しんだ。五月後半、ありがたい投稿があり俄然忙しくなつた。原稿の流し込みやレイアウトなら確かに何とかなる。しかし、内容に関することとなると話は違う。内容に応じて見識をもつた方々の意見を聞く必要がある。伺う方々はおられるのですが原稿が早めに集まつていなければそれも機能しにくい。やはり、締切日までに投稿いただくことがより良い紙面つくりには欠かせない。（S・M）